

沖縄県立博物館紀要

第 9 号

1983

沖縄県立博物館

序

沖縄県立博物館紀要の第9号を刊行いたしました。当館の学芸員が日頃の博物館事業を推進するにあたって、それぞれの分野でテーマを設定し、調査研究した成果の一端を報告する形でまとめたものであります。博物館は単に自然史資料や有形の文化財とか民具のような「モノ」を展示・公開するだけの施設であってはなりません。展示資料がその地域の人々といかにかかわってきたかを調査研究したうえで、その成果を展示に反映させる必要があります。また、毎年何回かの企画展で準備された資料を活用して、その成果を発表することも必要なことあります。

今年度は、伊江村と本部町での移動博物館の実施、常設の自然展示室の開設、3つの企画展の開催、博物館文化講座100回記念、県対県同志の交流展である特別展「態本県の歴史と文化」の開催など、きわめて大きな仕事が集中しました。この紀要是そのような多忙な中にあってまとめあげた研究成果の一部であります。この成果が広く一般に活用されるとともに、今後の研究に資するところがあれば幸いに存じます。

なお、本号には、博物館文化講座100回記念講演に講師としてお招きした、奈良国立文化財研究所々長坪井清足先生のご講演の一部を掲載させていただきました。坪井先生のご講演は、特にヨーロッパの博物館を視察された際に得た知見を、スライドを示しながら解説されたもので、今後の博物館における望ましい歴史展示の方向を啓発されたものとして、きわめて有益な内容となっておりますので、多くの方々に読んでいただきたいと願う次第であります。

昭和58年2月15日

沖縄県立博物館々長

大城徳次郎

沖縄県立博物館紀要

第 9 号

1983

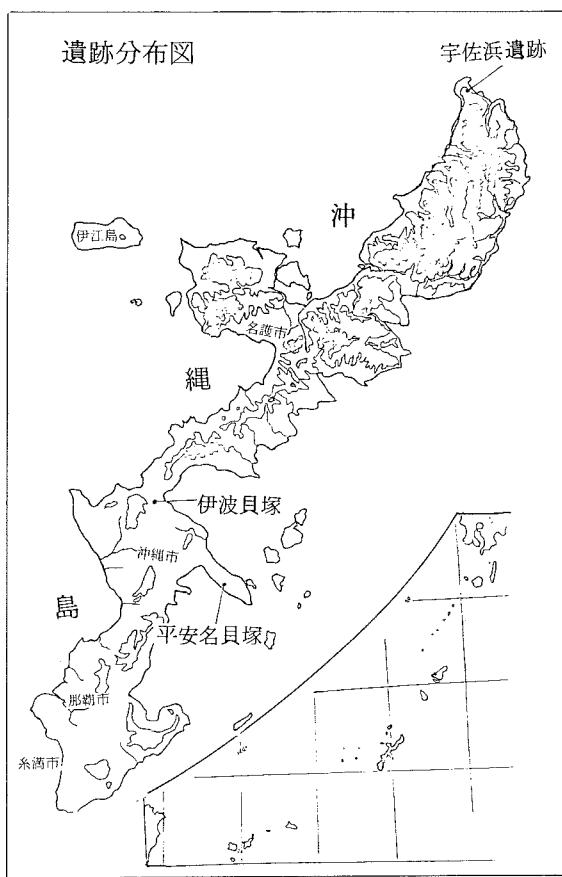
沖縄県立博物館

目 次

序	大 城 徳次郎	
多和田真淳調査収集の考古資料（II）	多和田 真淳・知念 勇	1
琉球列島の鹿類とキヨン類化石の復元 (琉球列島の古脊椎動物相——そのVII)	長谷川 善和・大城 逸朗 野原 朝秀	23
<博物館文化講座 100回記念講演>		
博物館の歴史展示について	坪井 清足	31
<資料紹介>		
辞令書等古文書調査報告補遺（-）	上江洲 敏夫	1

多和田真淳調査収集の考古資料（II）

多和田真淳・知念勇*



宇佐浜遺跡

発見 1954年6月17日

山入端清次、多和田真淳

国頭村辺戸にある沖縄編年中期の遺跡
1968年～71年のあいだに琉球政府文化財保護委員会によって、4回の発掘調査が実施された。沖縄本島の最北端辺戸岬は、高さ20m以上の断崖をなす、本遺跡はこの断崖直上、標高約50mの地にあり、南から北へゆるやかに下降する傾斜地にある。

発掘の結果、約20cmの表土層下に褐色土の第Ⅱ層約15cmと暗褐色土の第Ⅲ層15～20cmからなるが、Ⅱ層は時期差を認めがたく基本的には、単一文化層と考えられる。

遺構は、一辺2～4mの周間に幅約80cmで帯状に挙大の碎石をめぐらした方形の石組遺構が数基検出されている。内部には炉址とみられる焼土部分も確認されていることから石組住居址と考えられている。

出土遺物は土器と石器がある。石器には磨製石斧の他石皿と、磨石が多く出土している。土器は無文化の進んだ壺と甕があるが、とくに口縁部が肥厚し断面が三角状を呈する壺形の宇佐浜式土器が主体を占め、本遺跡がその標識遺跡となっている。

これらの土器や石組遺構の形態が、奄美大島宇宿貝塚発見の宇宿上層式と石組遺構の形態等が類似することから、両地域が同一文化圏であると考えられるようになった。

本遺跡北東崖下の海岸砂丘には沖縄編年後期に属する宇佐浜B貝塚がある。また南西に隣接してC地点、南東約200mにB、E地点北方約100mにF地点の中興遺跡が点在する。

開平地に立地すること、貝類や獸魚骨類が少くないことなどは中期遺跡の特徴である。

1972年5月15日、国の史跡に指定された。

今回紹介する遺物は土器と石器である。

(★たわだ しんじゅん 那覇市史編集委員)

(★★ちねん いさむ 県立博物館主任学芸員)

土 器

宇佐浜式土器

採集土器はすべて宇佐浜式に属するものである。口縁部は第1図1～7と第2図1の8個あるが、いずれも壺形で鉢形はなく、無文化が進み有文は第1図1～3第2図1の4個のみである。

第1図1と2は同一個体とみられるもので口縁部断面が三角状を呈する壺形の宇佐浜式土器である。口縁部には鞍状の凸帯文が施され、その直下の頸部から肩部にかけて3本の沈線文が施されている。肩部にも横位の沈線文が一本みられる。

鞍状凸帯文は、対象に向い合って、対をなしていたとみられ、その中間の頸部に3本の沈線が配されていたと推察できる。沈線は先端の鋭利な工具によったとみられる。

黒褐色を呈し、表面調整がよく手ざわりがなめらかで、宇佐浜式特有のザラついた感じがない。口径10.2cm、器厚7mm、胎土には砂粒と石英粒が混入。

同図3は口縁部断面が三角状の壺形土器である。口唇部に単籠工具による幅3mmの横捺刻文が施されているが、胴部は無文である。器面調整が良く、手ざわりはなめらかである。

褐色で、胎土には白色の石灰質混入物があり、その抜け痕がポーラスな面となっている。器厚7mm口径不明。

同図4は口縁部断面が三角状を呈する無文壺形土器、器面調整良好。茶褐色を呈し、胎土には砂粒と石英が混入、器厚は8～9mm、同図1～3に比して焼成が弱く、脆弱で厚手の土器である。

同図5は口縁部断面が三角状の無文壺形土器・器面は剥離がめだちザラついている。石灰質砂粒が少量混入するが、同図1～4に比して、混入物は少なく、胎土は緻密である器色は口唇部の一部が赤褐色で他は黄褐色となる。焼成良好、器厚8mm

同図6は、口縁部の肥厚部が広くなるため断面形が蛇頭状となる、無文壺形土器、表面調整が良く手ざわりがなめらかである。器色は胎土の中央部が黒色であるが表裏面ともあざやかな赤褐色となる。口径6mm薄手、焼成は弱く脆弱な土器、砂粒状物質混入。

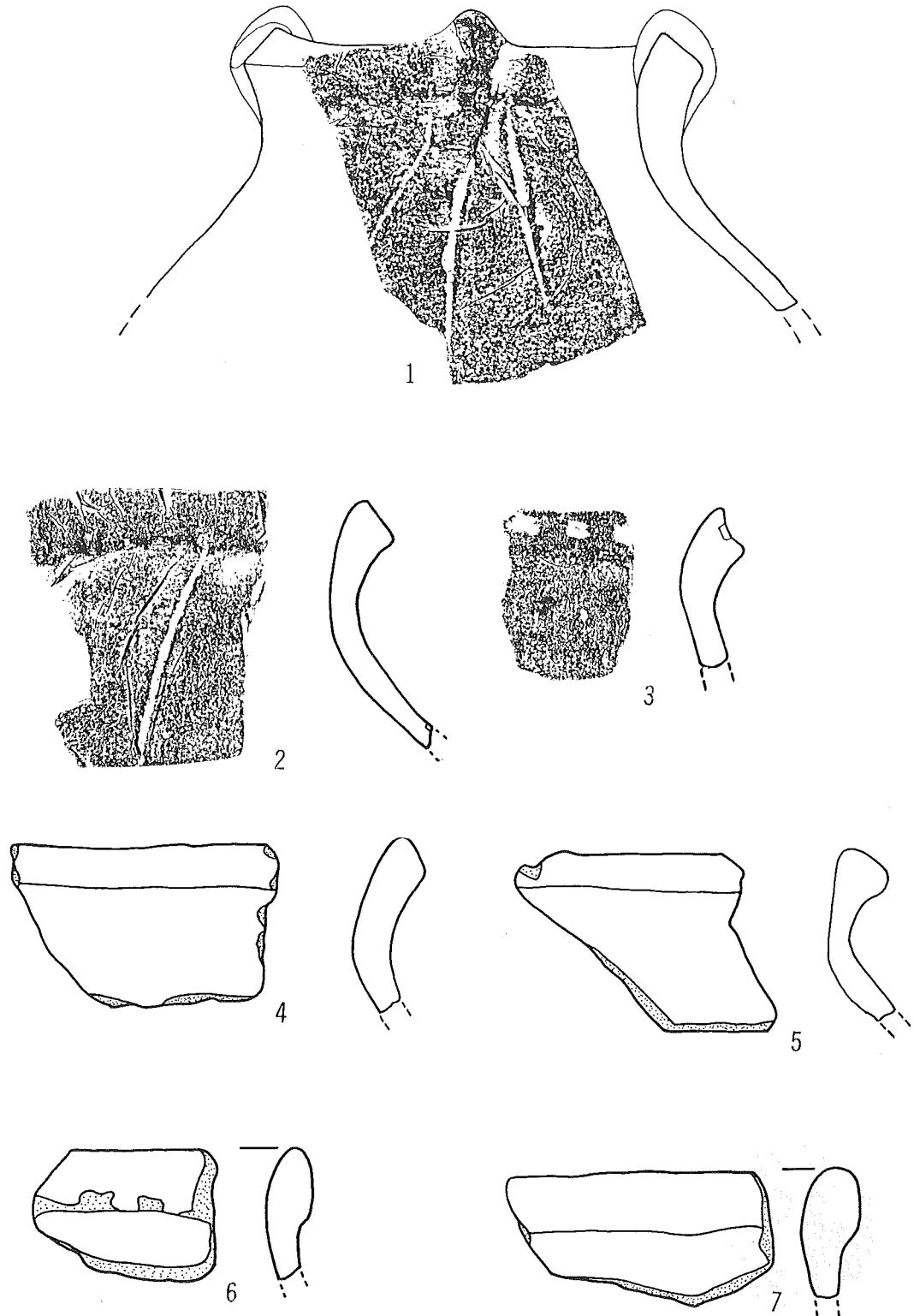
同図7は口径推算10.5cm、口縁部の断面がカマボコ状を呈する無文壺形とみられる。器面調整、焼成ともきわめて良好で硬質な土器。器厚6mm、器色黄褐色、胎土には雲母状の光沢を有する物質と石英小量が混入。

第2図1は、口縁断面が三角状をなす有文壺形土器、口縁部下1.5cmとさらに下へ1.5cmのところにそれぞれ横位と縦位のミミズばれ状文があり、その上下、左右には細い刺突文が施されている。表面調整も良く剝利はみられない。石英粒と雲母が混入するため手ざわりはザラつく感がある。器色は黒色及至茶褐色、焼成は機分弱い、器厚8～9mmと厚手。

同図3は、胴部であるが上端が外反するため、頸部とみられる。上端部から4.5cmのところでカーヴする単籠工具による横位の爪形文が1本と、その上部右よりに縦位の1.2cm間隔をもって、縦位の爪形文が2本配されている。焼成、胎土等の特徴は上述2と同じである。

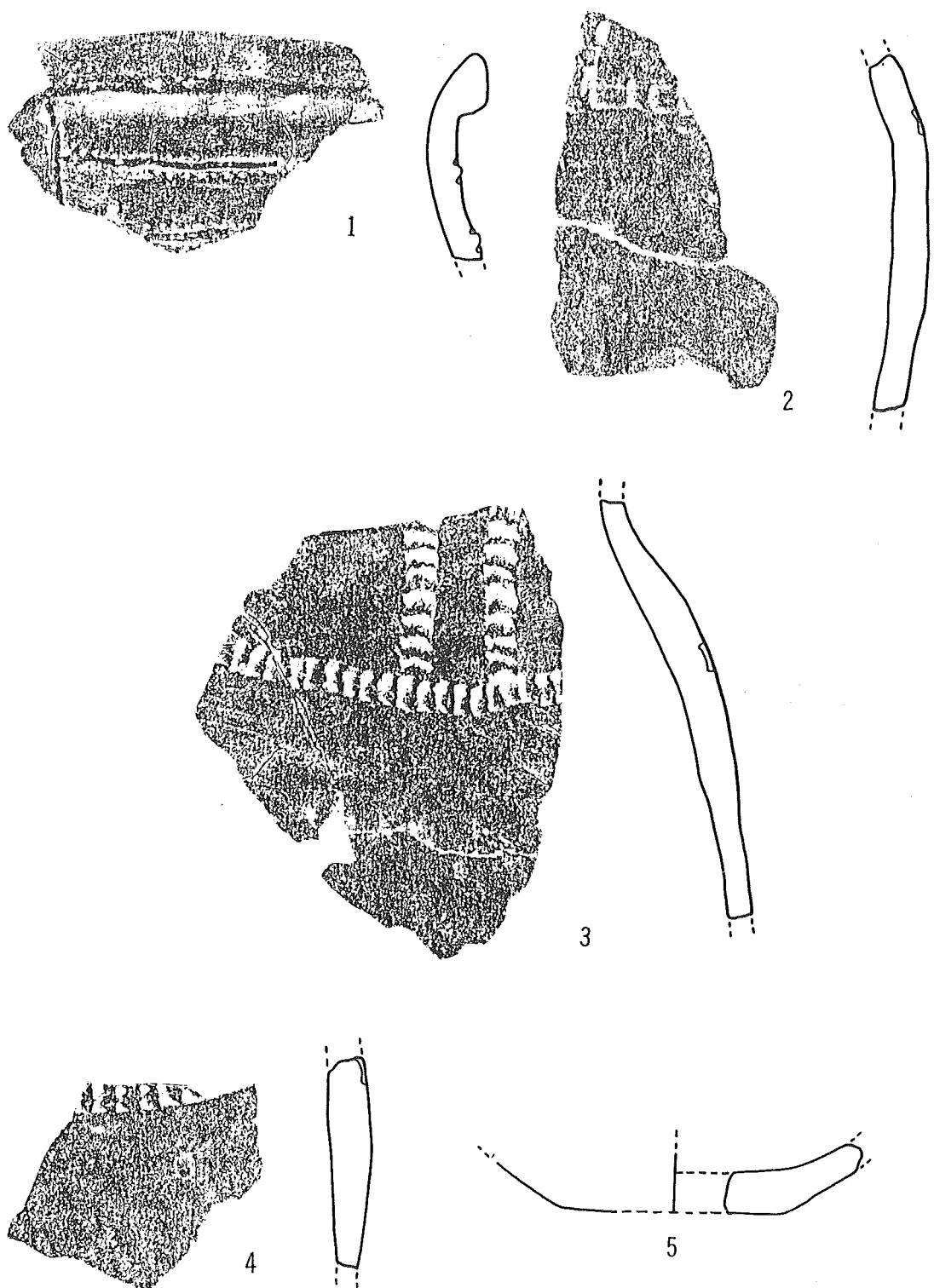
同図4は同図3と同一個体とみられるもので、上端に爪形文を有する。

同図5は、唯一の底部資料である。底径推算5cmの平底で、器色、胎土等は同図2と3に近い。底



第1図 宇佐浜遺跡・土器

0 5cm



第2図 宇佐浜遺跡・土器

0 5cm

部から胴部への立上りがゆるやかなことから大型の器形が想定される。底部厚1cm、胴部への移行部8mm。

石 器

石 斧

石斧は第3図1～5の5個である。これら5個のうち、刃部を完全に残すのは同図3の1個のみで、他はいずれも刃部を欠くもので石斧としての用途は果さなくなつて、遺棄されたかもしくは、敲石等に転用されたとみられるものである。

同図1は蛤刃の全面磨製石斧であったとみられるが頭部の一部と刃部が欠失している。最大長11.1cm、最大幅3.2cm、最大厚3.2cm、重量310g、石質斑レイ岩。

同図2は一方の面はよく研磨されているが他面は素材に凹凸が多かったらしく、研磨が不徹底である。片刃状の石斧で刃部は一部を残し、他は欠失している。同図右側図にみられるように、頭部から刃部にかけて、作成時のものとみられる陵線が残っており、屋根形的となっている。最大長10.2cm、最大幅5.4cm、最大厚1.7cm、重量195g偏平、石器斑レイ岩。

同図3は青灰色の頭部を欠く両刃石斧。全面入念に研磨が施されている。作成時のものとみられる研磨痕が刃部と平行に、長軸と直交するかたちで認められる。図の右側図に示したように、刃部左端から途中までは、刃部と直行する方向で使用痕が認められる。刃部は先端部が研磨されており、刃先は幅約1.5mmの面取りがなされ銳利さを失なっている蛤刃状の石斧。図に波線で示したように陵線がみられる。最大長5.7cm、最大幅4.3cm、最大厚1.8cm、重量85g、石質砂岩。

同図4は全面磨製の片刃石斧。刃部は大半が欠損、残存部も磨耗が著しく、銳利さを失なっている。頭部の一端から敲打によるとみられる剝離痕がみられる。最大長7.2cm、最大幅3.3cm、最大厚1.8cm、重量75g、石質斑レイ岩。

同図5は頭部近くと側面を中心と局部的に研磨がみられるが自然面を多く残している。もともとは石斧であったとみられるが現況でみるとかぎり、石斧としてよりも敲石として再使用されたとみられる。横断面図でわかるように左側に反っている。最大長9.8cm、最大幅4.8cm、最大厚2.3cm、重量195g、石質砂岩。

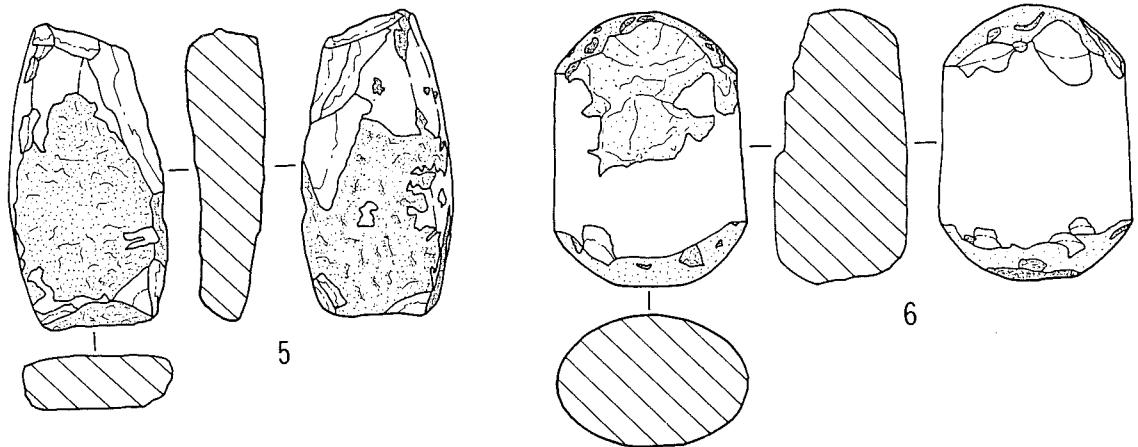
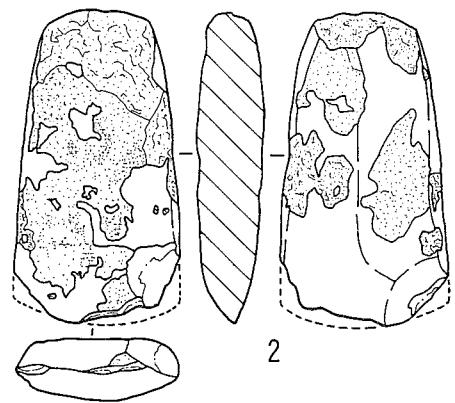
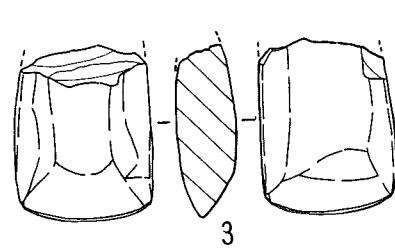
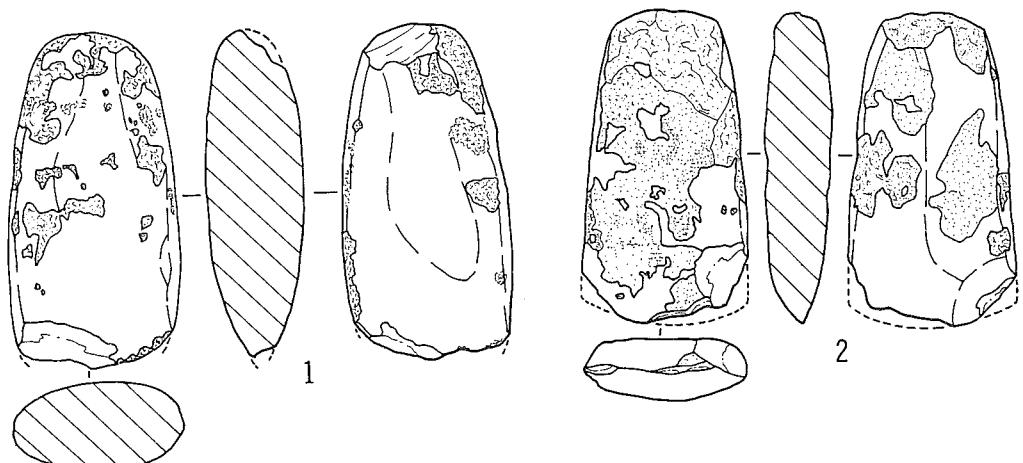
同図6は柱状の敲石で敲打面の上端と下端をのぞき、全面入念に研磨が施されている。上端と下端は半月状に研磨して整形されているが使用による敲打痕が認められる。平面図の右側は強打による欠損がみられる。最大長8.9cm、最大幅6.2cm、最大厚4.1cm、重量449g、石質斑レイ岩。

伊波貝塚

1919年、鳥居龍藏発見

沖縄本島中部の東海岸金武湾に面した石川市宇伊波標高約90cmの琉球石灰岩台地北東崖下にある貝塚は岩かけ部から市街地へ向うゆるやかな傾斜地に立地する。その範囲は、東西160m南北20～25mの範囲内に貝層が点在する。

1919年鳥居博士によって発見され「石川村チヌヒンチャ貝塚」として、中央の学会誌に紹介さ



第3図 宇佐浜遺跡・石器

0 10cm

れた。

1920年（大正9）大山柏氏によって発掘調査がなされ、1922年（大正11）報告書が刊行された。

それによると、多種、多量の貝類、魚骨、シゴン等の獸魚骨に混じって、人工遺物である土器、石器、貝製品などが発見された。

土器は伊波式土器が主体で、荻堂式等があるが少くない。1972年5月15日国の史跡に指定された。

土 器

伊波式土器

土器は形式不明の小破片と奄美系をのぞけばすべて伊波式である。

第1種は伊波式の特徴である口頸部の文様が上段、中段、下段の3段に分れるが、上段と下段に叉状工具による平行点刻文がそれぞれ2列施され、中段が無文となり胴部から口縁部にかけて外反する深鉢型平底土器である。

第4図1～5、第5図1～6、第6図1～4、第7図1の合計11個で、第1類が主体をなす。

第4図1は口径21cmの比較的大型の土器である。口縁は山形の波状をなし、口頸部上段の文様は、波状口縁に平行して施されるため、文様も波状をなす。器色は外面黒色、内面は赤褐色を呈する。内外面ともよく器面調整が行き届きハケ目状の調整痕をよく残す。

現存部下端の割れ目は、輪積みのつぎ目が明瞭に残っている。器厚7mm。

同図2と3は、表裏面とも赤褐色を呈するもので、口縁部が直線的となるため、大型の器形が想定できる。胎土にはいずれも石英と石灰質砂粒が含まれる。表面調整は1ほどは徹底していない。器厚6mmで薄手で波状口縁、口唇部は無文。

同図4は口頸部上段の点刻文は1列、波状口縁で口唇部が無文となるのは前述2、3と同様であるが表裏面とも調整面はハゲ落ちておりザラついた感じがする。表面黒色で内面は赤褐色、器厚6mm。

同図5は口縁部で小片、胎土等のその他の特徴はすべて、2、3と同様。

第5図1は、第4図1とともに口頸の推算できる資料である。口頸推算15cmで伊波式としては中型である。ゆるやかな波状口縁をなし、口唇部は無文、器面調整がよく、表面黒色で裏面は赤褐色となる。胎土には石英粒が混入、器厚7mm。

同図2は口縁部の山形が急で頸部中段の無文部は広く、雄大な器形が想定される。表裏面ともハケ目状の調整痕が明瞭に残っている。口唇部は無文、下端部の割れ目は輪積み痕を残している。表面黒色で裏面は褐色である。胎土には石英粒が混入、器厚8mm。

同図3は胴部破片表面黒色で石英を多量混入。器厚8mm。

同図4は胴部破片は表面黒色で石英を多量に混入、器厚8mm。

同図5は口頸部とみられる破片で表裏面とも赤褐色を呈する。石英粒を多量に混入、器厚7mm。

同図6は口頸部の文様が上下段とも1列で山形の波状口縁をなす。波頂部から口頸部上下段と同

様の点刻文が縦に1列施されており、口唇部には単範工具による点刻文がみられる。器面は部分的に黒色となるが他は明るい赤褐色を呈する。器面調整によるハケ目状痕が明瞭に残っている。石英の混入は少くない、器厚5mmと薄手の土器。

第6図1は口頸部近くの破片、口頸部上段と下段の文様間が2cmとせまい、表裏面とも赤褐色で石英粒が多く混入する。器厚7mm。

第7図1は、口頸部上端と下端に点刻文が一列施されるもので、波状口縁をなすが波頂部から同様の点刻文が縦に一列施されるもので、口唇部に単範工具状の連点文が施されている。器厚6mmと薄手となることや文様等の特徴は6に類似する。石英混入。

第2類

本類は第1類の点刻文が短沈線となるもので、他の特徴は1類に類似する。第4図6と第6図2のみで少くない。

第3類

本類は口頸部の上段と下段に一組または二組の点刻文が施され中段を斜沈線や綾杉状文で埋めるものである。

第6図7、第7図1、3、4、5、6、8の7個が本類に属する。

第6図7は小破片のため文様の展開や器形は不明、沈線は細かく表裏面とも黒色を呈し両面とも器面調整によるハケ目状痕を残す。石英混入、器厚5mm。

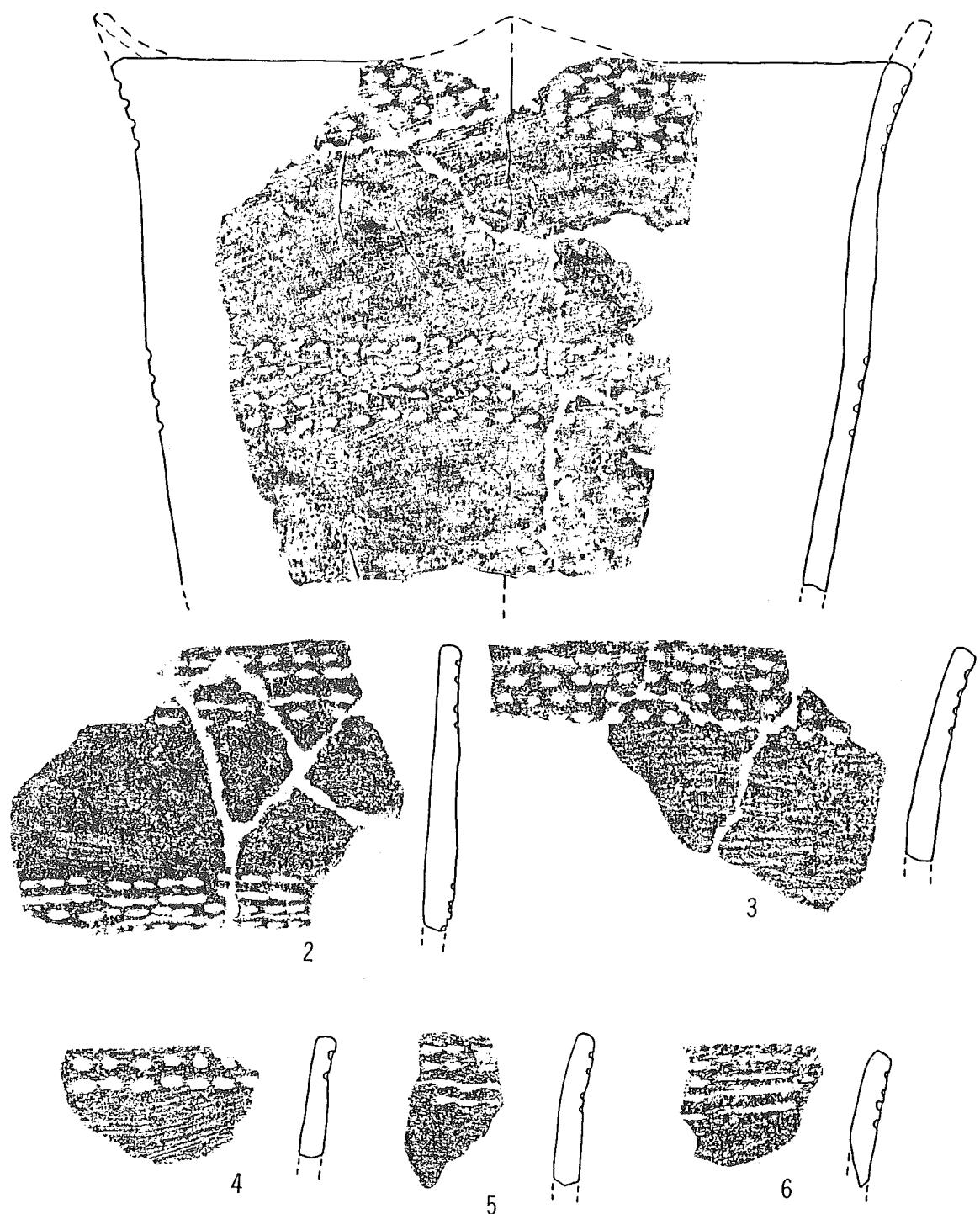
同図3は口頸部とみられる破片、叉状工具による平行線文が斜状に方向をかえて施されその下端に一列横位の連点文が配されている表面は黒褐色で裏面は黒色である。石英混入、器厚7mm。

同図4は口頸部上段に横位の点刻文が一列に施され、その下に縦位の斜沈線文が方向を異にして全面に施されている。これらの文様は細沈線であり、いわゆる奄美的感じのする文様である。口径推算12.5cm、口縁部波頂部は突起状をなす。口唇部には、波頂部とその左右に5cm以内で短沈線文が施される。

全面黒色で内面は器面調整時のハケ目状痕がみられるが外面は表面剥落し、ザラついた感じである。多量の石英粒混入、焼成が弱く脆弱な土器である。器厚6mm。

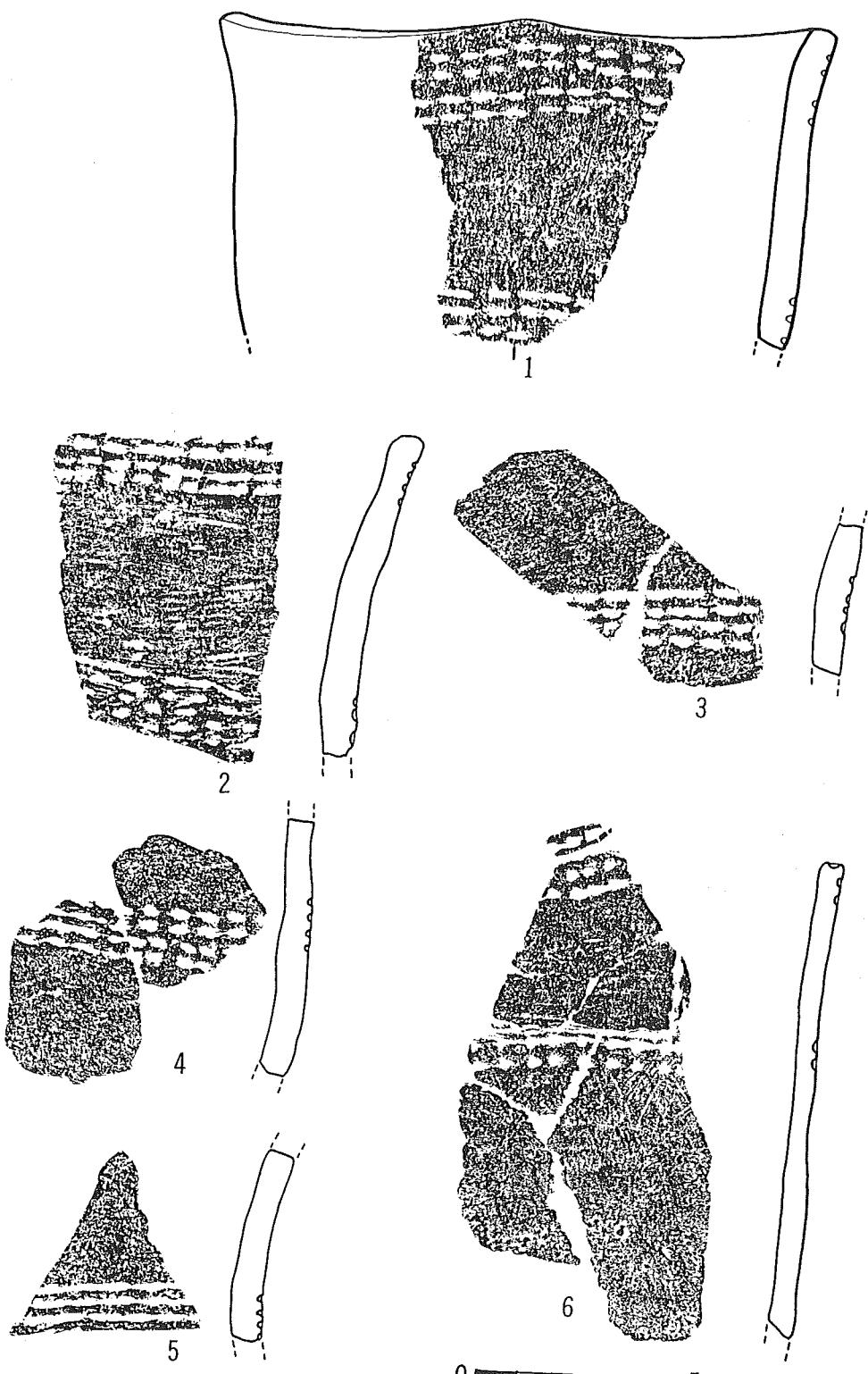
第7図6は口縁部の山形が簡略化された、段差をなすもので、口唇部に一条の刺突文が施されている。口頸部上段に横位の2条点刻文が施されその下に長さ1.5cmで太目の平行線が綾杉状に施されている。外面は黒褐色、内面は赤褐色となる。口縁部は外反するが胴部にかけてふくらみを有するとみられ、文様の等の特徴から荻堂的な要素を有する。伊波式から移行期のものと考えられる。石英混入、器厚7mm。

同図5、8は口頸部とみられる破片で、5は叉状工具によるとみられる斜沈線文で、8は単ベラ工具による綾杉状文である。器厚は5が7mm、6が6mm、両方とも黒味をおびた褐色である。いずれも石英混入。

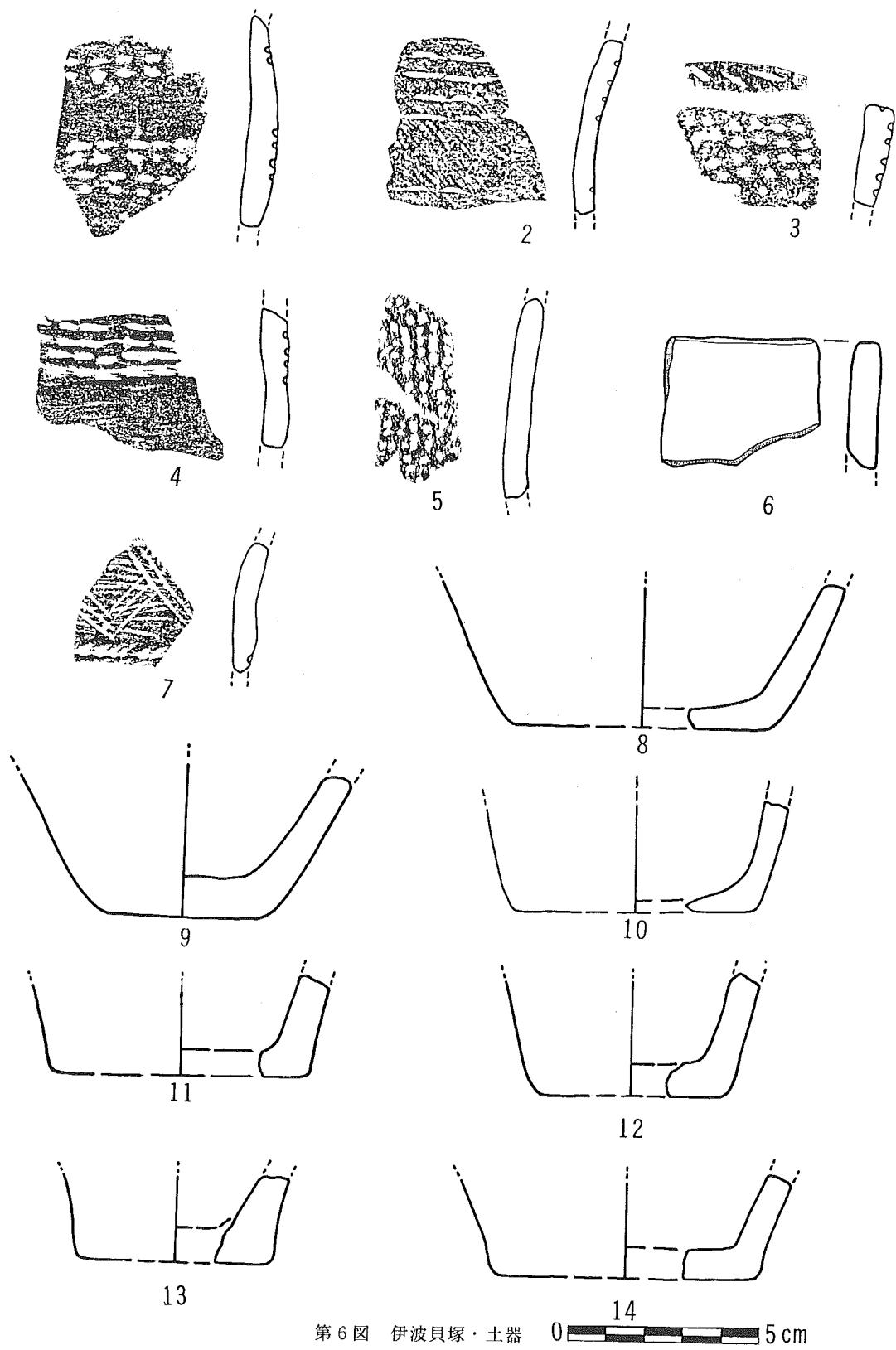


第4図 伊波貝塚・土器

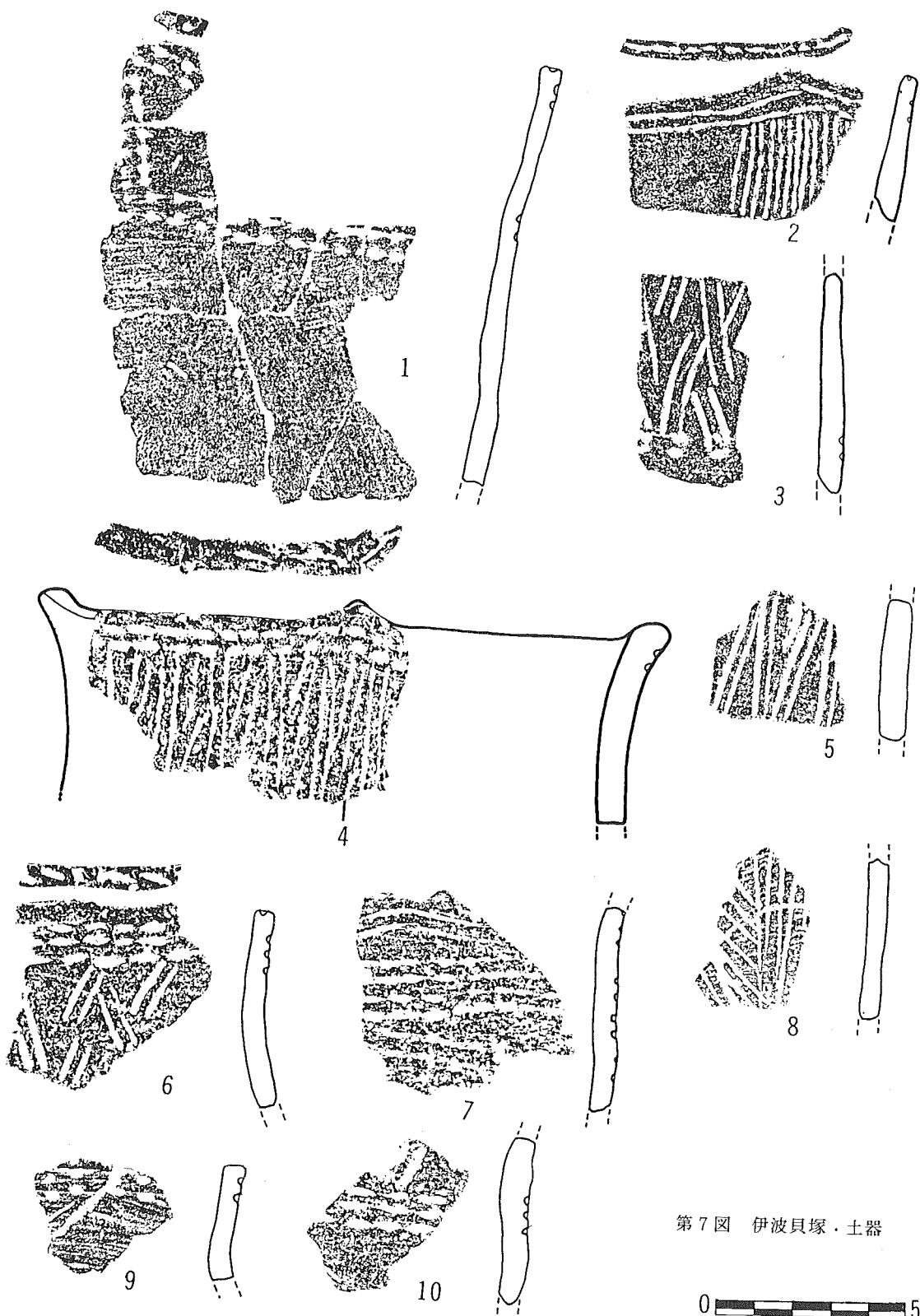
0 5 cm



第5図 伊波貝塚・土器



第6図 伊波貝塚・土器 0 5 cm



第7図 伊波貝塚・土器

0 5cm

その他の土器

第6図5と第7図2は、いわゆる奄美系とみられる土器、両方とも先端の鋭い单箇工具による刺突文である。前者は石英が少量混入する赤褐色の土器で、器厚7mm、器形不明。後者は、波状口縁をなすこと、文様の配置等からみて、伊波式と共通する点が多い。胎土に石英の混入がみられる。胎土のこまやかなことや文様等の特徴から、いわゆる奄美的な土器である。全体的に赤褐色で、器厚7mm。

第4図6、第6図7、第7図6、7、9、10は口縁部がわずかに外反し、胴部にふくらみを有する深鉢形の器形とみられるもので、文様等から荻堂的な特徴を有する土器である。器厚は平均7～8mmで厚目である。

第6図6は唯一の無文口縁土器である。表裏面とも赤褐色を呈し、石英を多く混入、器厚7mm、器形不明。

底部は第6図8～14の7個ある。8は底径6.8cm、両面ともよく表面調整されている黒色の土器底部の厚さ6mmで薄手である。石英混入。9は底径4.7cm、表裏面の調整が良く残っている。器色は表面黒褐色で、裏面赤褐色、石英粒が多量に混入、底部厚8mm。

同図10は底径推算7.5cm、表裏とも赤褐、底部厚5mmと薄い。石英片混入。

同図11は底径推算7cm、表面黒色、内面赤褐色、底部厚不明、胴部への立上りが幾分外反をなす点は他の土器とは異なる点である。石英粒の混入は少くない。

同図14は底径推算7cm、表裏面とも赤褐色、石英が多量に混入、底部の厚さ8mm。

骨製品

ジュゴンの助骨とみられるもので、図の上端部に抉り入状のけずり痕がみられるものである。抉りの中心部とみられる部分から欠失している。他には加工痕はみられない。用途不明の骨器片である。最大長14cm、最大幅2.6cm、最大厚1.6cm、重量65g。

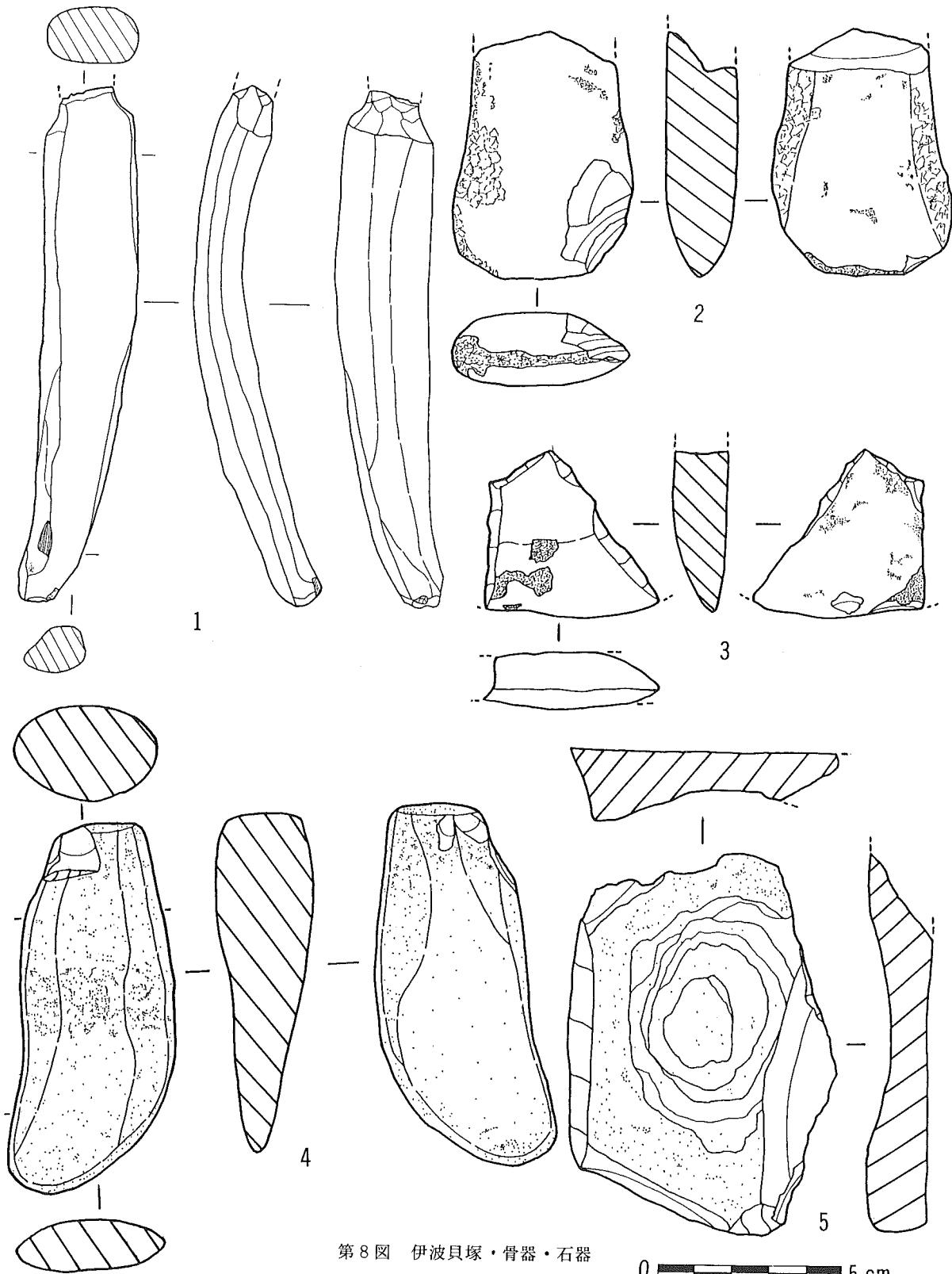
石 器

第8図2は全面研磨の石斧であるが、刃部の円味がなくなる程磨耗しており石斧としては役割を果さないものである。刃の部分は幅広く、頭部へ向けて幅がせばまるまさかり形をなす。頭部が欠失し、刃部は敲打によるとみられる剥利痕がみられるため、敲石に転用して使用されたとみられる。最大幅4.5cm、最大厚1.7cm、重量110g、石質斑レイ岩。

同図2は図の下端部に石斧状の刃部が作り出され、全面研磨が施されている。縦断面図でみると片刃状となるが破片のため全体形はうかがえない。石斧とは異なった形状をなす。最大厚1.5cm、重量45g、石質砂岩。

同図4は刃先状をなした砂岩（ニービのシン）で全面研磨によって整形されたとみられる。図の上端はフラットに整形され、一部打痕による欠損がみられる。形状的には敲石的な用途が考えられるが断定はしがたい。最大長10cm、最大幅4.2cm、最大厚2.2cm、重量130g。

同図5は一面に敲打によるとみられるクボミがみられる。他の面は平坦である。図の上部と右側



第8図 伊波貝塚・骨器・石器

0 5 cm

が欠失する。クボミは長径 1.8 cm、短形 4.5 cm の橢円状をなす、重量 9g、石質片状砂岩、厚さ 2 cm の均一な版状をなす。

平安名貝塚

本遺跡は前回(1)で報告を行なったが、報告もれがあるので、追加して報告する。

今回報告を行う土器はすべて有文の口縁部で10点ある。

このうち、伊波式が第9図1～7で最も多く、荻堂式が3点である。このうち文様は大山式類似のもの1点あるが、器形からみて、荻堂式に含めることにしたい。移行形式のものと考えられる。

同図1～5は伊波貝塚において、第1類に分類したものである。1、2、4は口頸部上端に一条の点刻が施されるもので口唇部にはそれぞれ点刻文が施される。いずれも外反する波状口縁である。器厚は6～7 mm、器色は黒褐色ないし赤褐色を呈する。石英混入。

同図6は口頸部上段に单箇工具による連点文が一列施され、その下に綾杉状の斜沈線文が施されている。黒色を呈し、器厚6 mm。

同図7は口径推算12 cm、口頸部の文様が6段に区分できるものである。上から一段目は横位の短沈線文、2段目は綾杉状文、3段目は横位の短沈線文、4段目は綾杉状文、5段目は横位の短沈線文が2列、6段目は鋸歯状文が配される。図の右端は上一段目の短沈線文が縦位にあり、上から2段目と4段目の綾杉状文を閉うかたちとなっている。

全面黒色で、石英混入、器厚7 mmで外反を呈する。焼成弱く脆弱な土器。

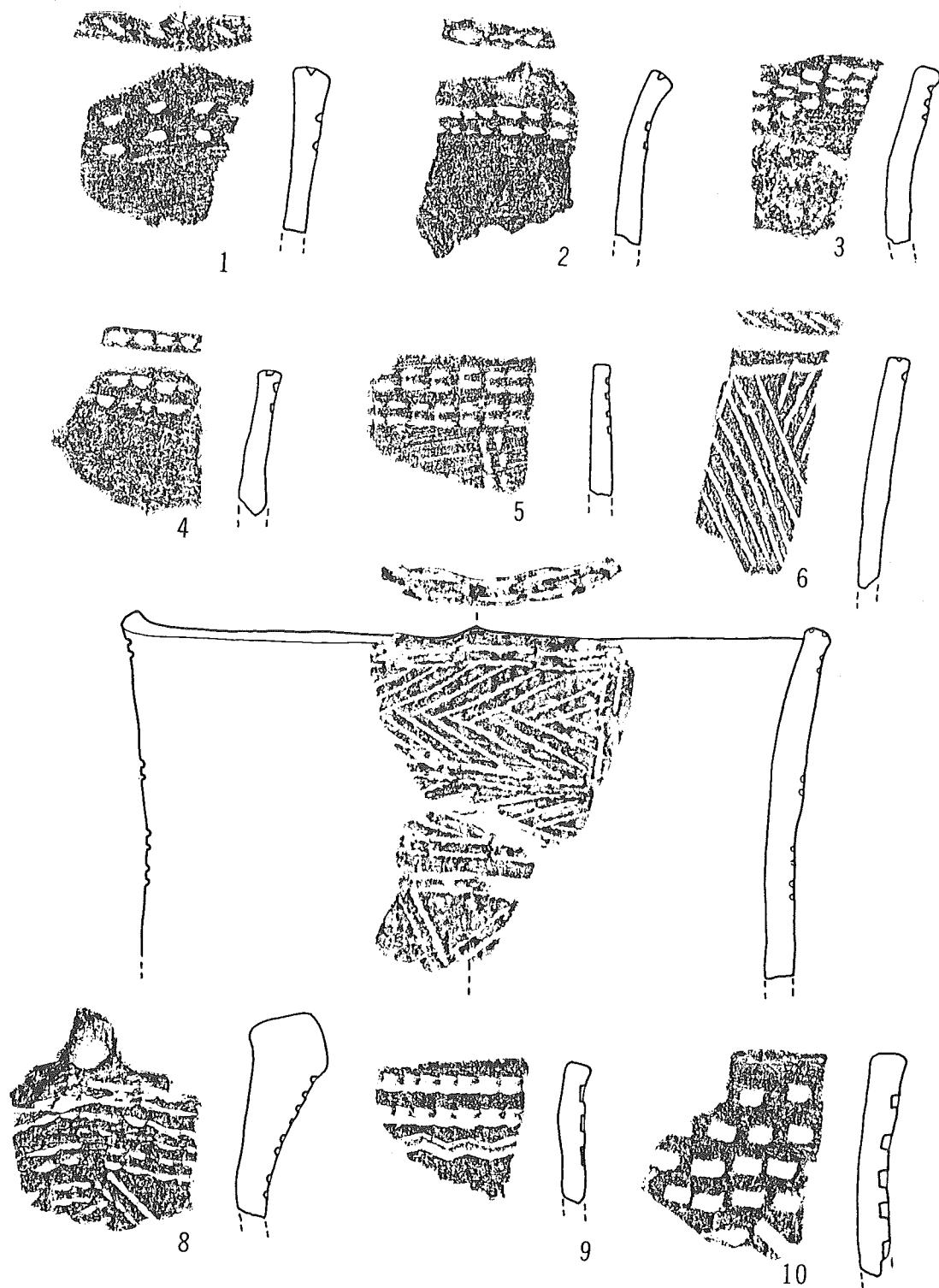
文様は綾杉状文以外はすべて叉状工具によるもので、平行線文である。口唇部にも平行短沈線文がみられる。

同図8は荻堂式の特徴を有する口縁部の突起部が肥厚し、叉状工具による横位の平行連点文が口頸部上段に2列とその下に同様の平行連点鋸歯状文が配される。表裏面とも赤褐色を呈し、石英が多く混入するもので器厚8 mm。

同図9は单箇工具による横位の押引文が口頸部上段に2列とその下に鋸歯状の押引文が1列配されている。器色は赤褐色、口縁部が幾分しまり、胴部においてふくらみをもつ器形とみられ、荻堂式とみなされるものである。石英混入。器厚7 mm。

同図10は单箇工具による横掠刻文が4列、口頸部上段に施され、その下に单箇工具の幅1.2 cmの鋸状文が配されるものである。器形は口縁部がしまり、胴部がふくらむ、荻堂式とみなされる土器である。しかし文様には大山式的要素もあり、移行期の形式と考えられる。表裏面とも赤褐色、石英粒が小量混入、器厚8 mmでやや厚手の土器。

遺物の実測は、沖縄国際大学4年次大城剛君が担当し、石質の同定は当館主任学芸員大城逸朗にお願いした感謝申し上げます。

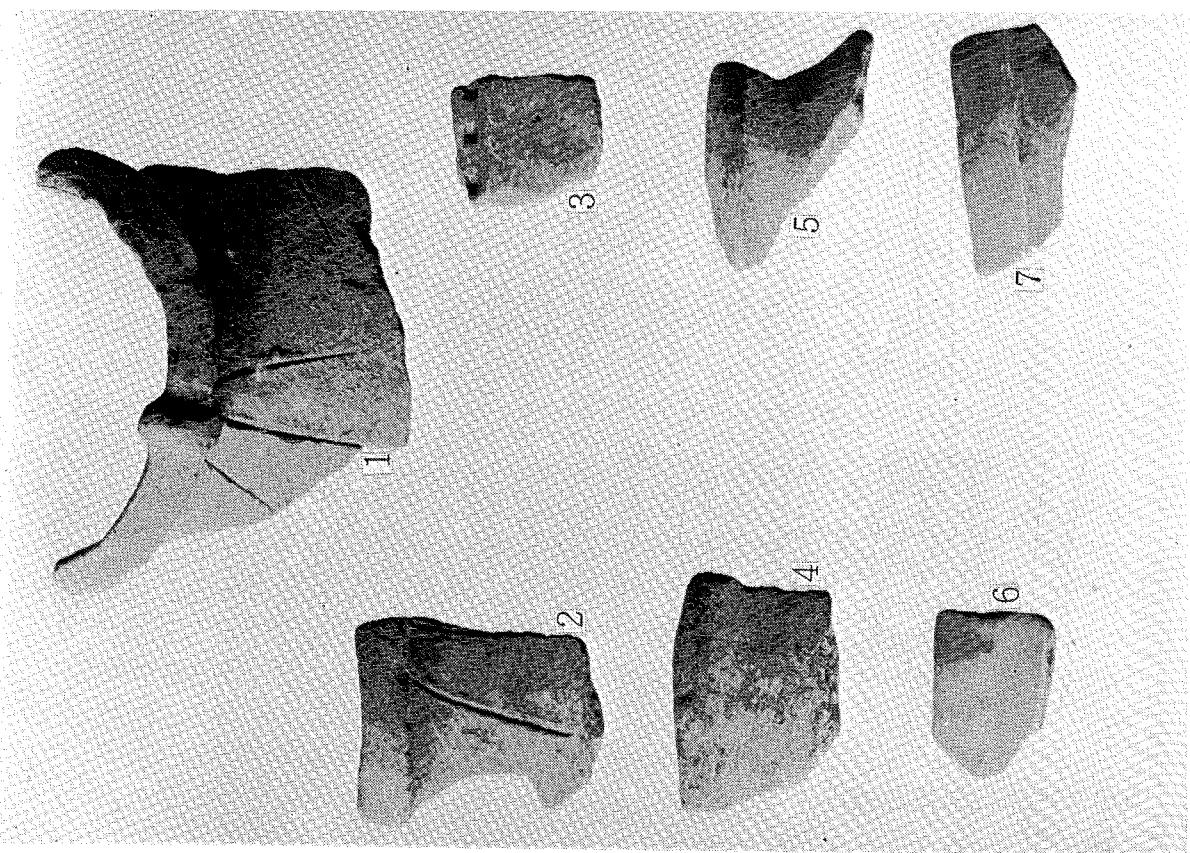
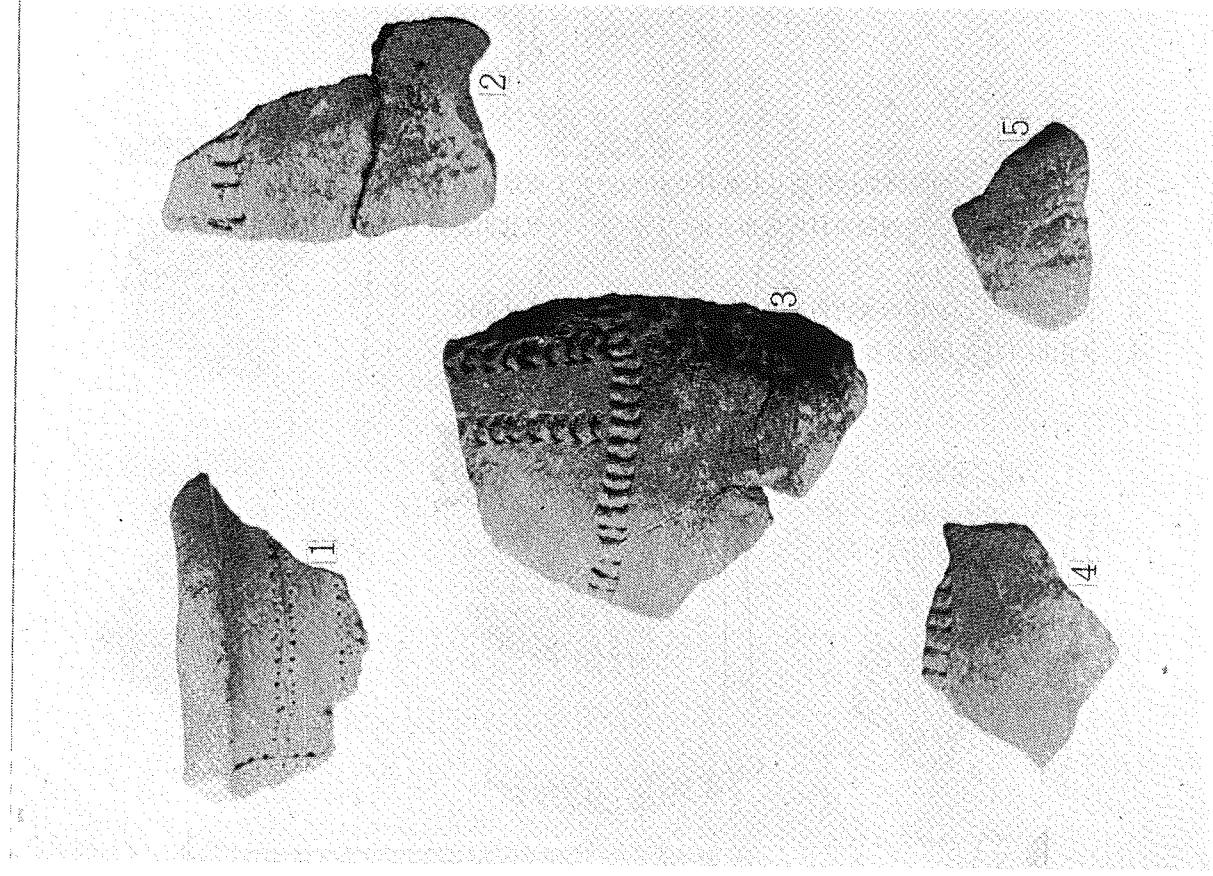


第9図 平安名貝塚・土器

0 5cm

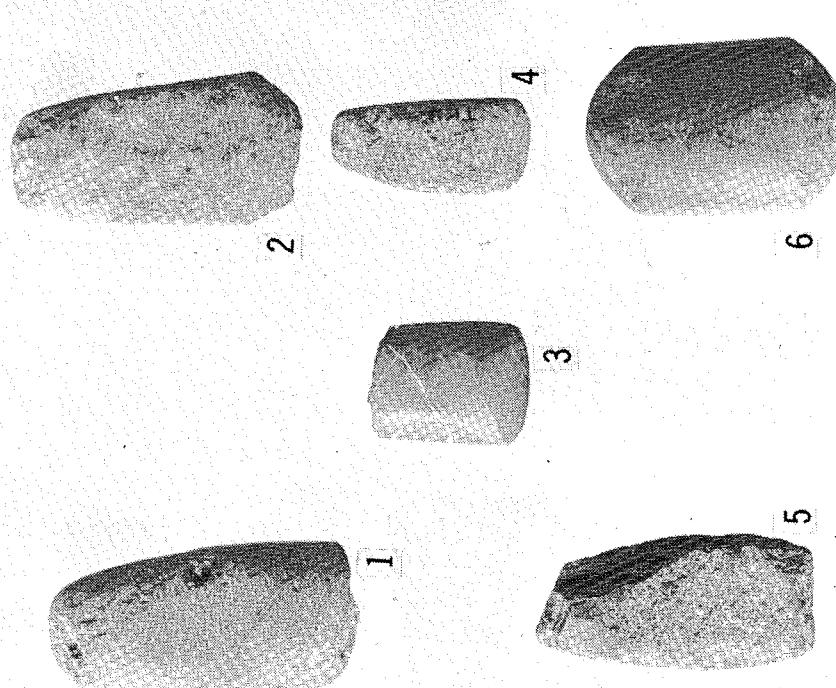
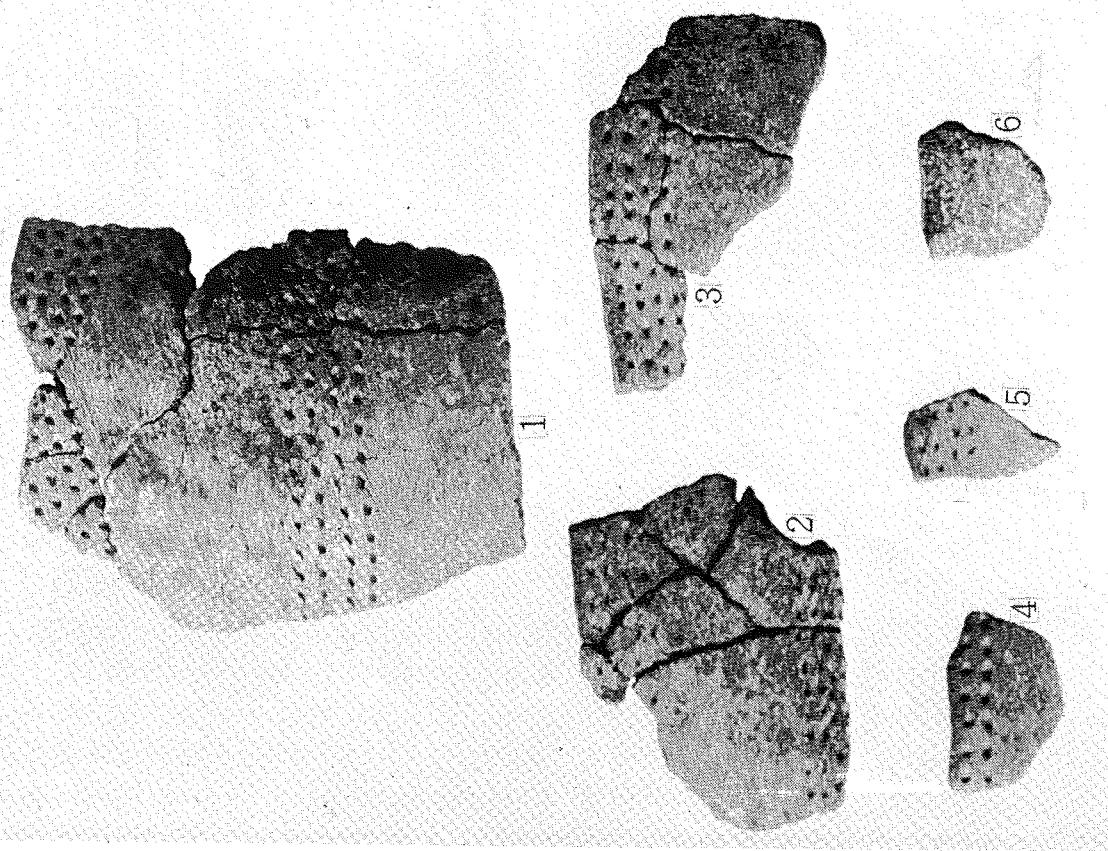
参考文献

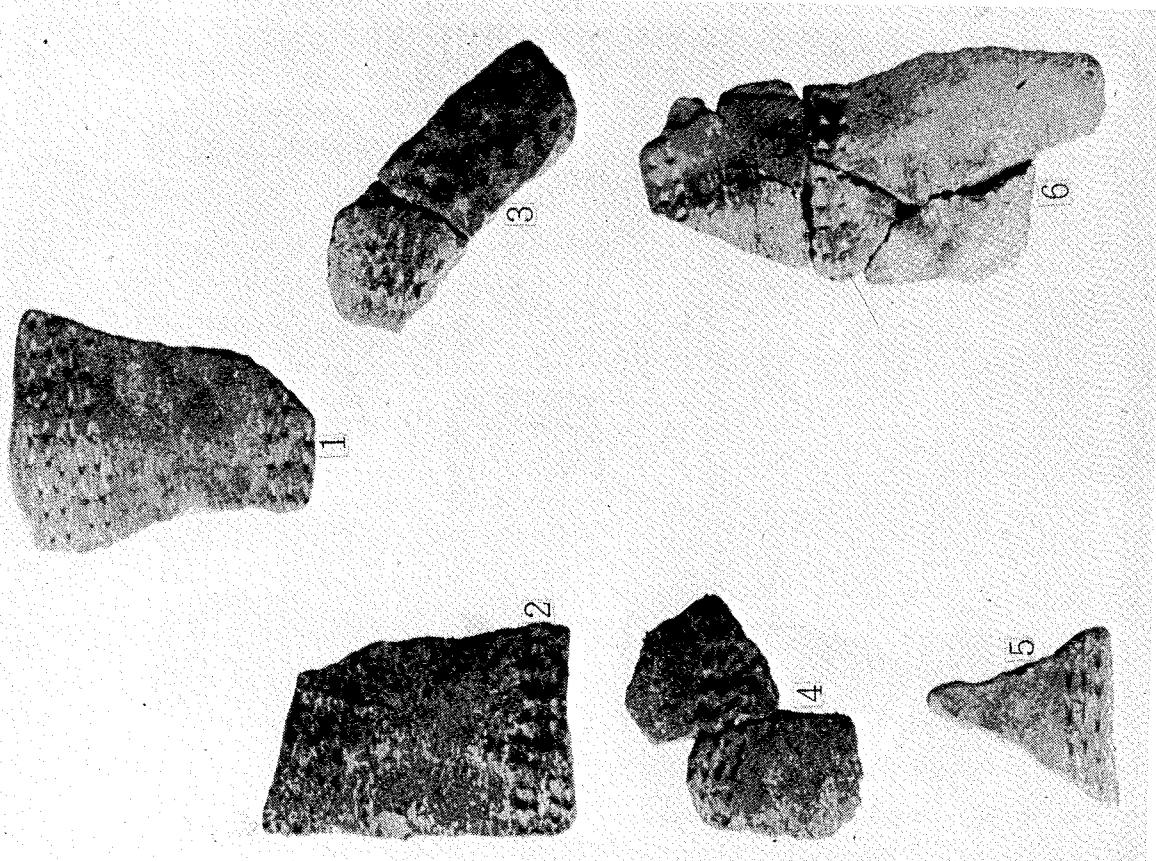
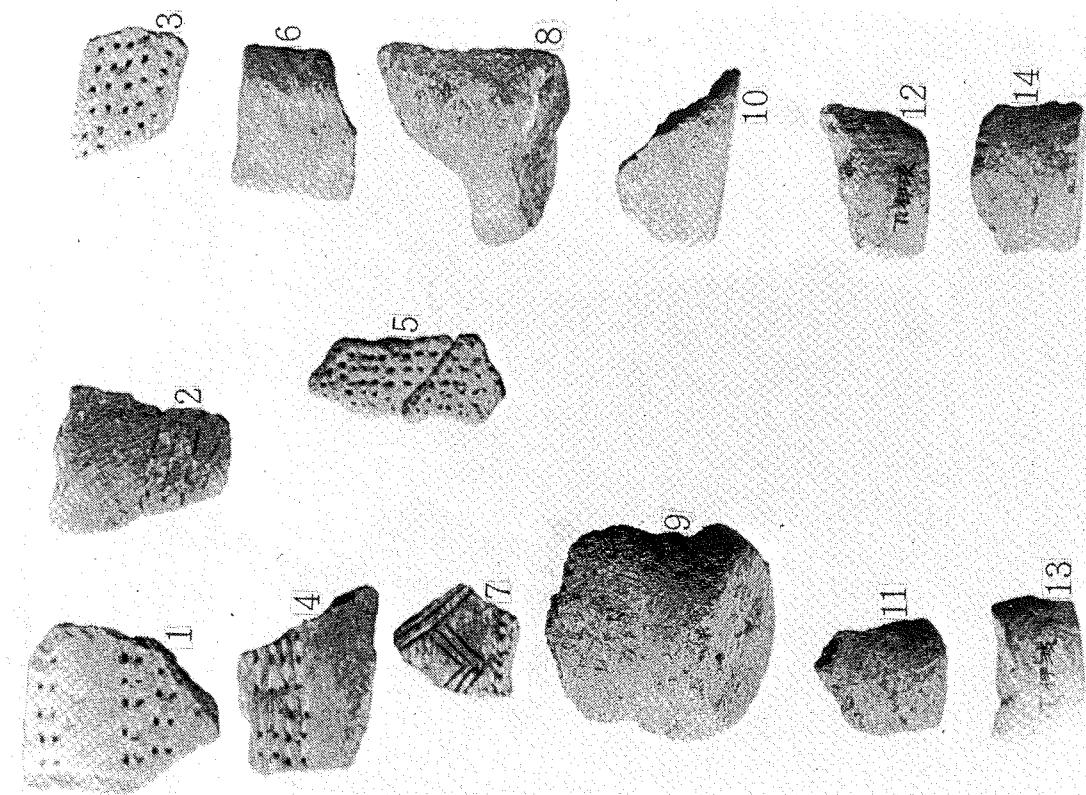
1. 鳥居龍藏 「沖縄諸島に住居せし先住民について」東京人類学会雑誌第20巻 227号
2. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」「文化財要覧（1956年版）」琉球政府文化財保護委員会
3. 高宮廣衛「那覇市の考古資料」那覇市史第1巻1号、1968
4. 大山柏「琉球伊波貝発掘報告」東京大学 1922



第4図版 伊波貝塚・土器

第3図版 宇佐浜遺跡・石器



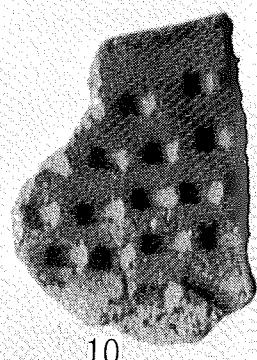
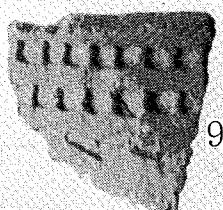
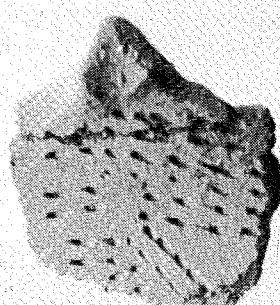
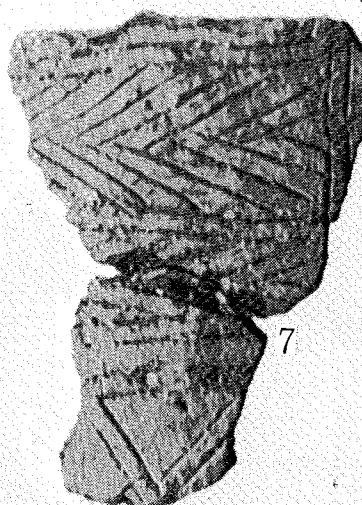
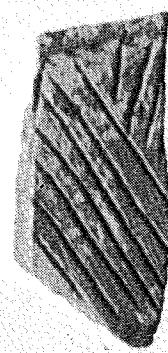
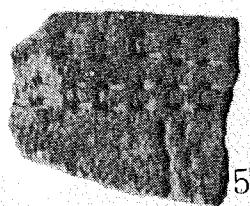
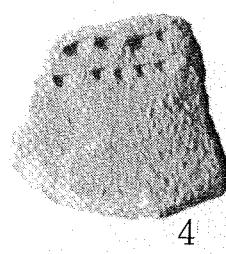
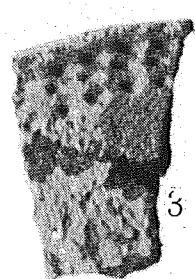
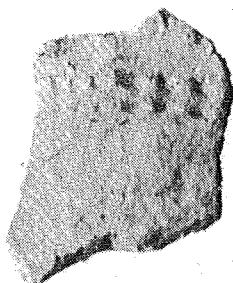
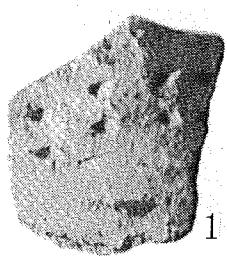


第 8 図版 伊波貝塚・土器



第 7 図版 伊波貝塚・土器





第9図版 平安名貝塚・土器

琉球列島の鹿類とキヨン類化石の復元 (琉球列島の古脊椎動物相—そのVIII)

長谷川善和^{*}・大城逸朗^{**}・野原朝秀^{***}

Reconstructions of Pleistocene Deers and Muntiac Fossils from Ryukyu Islands, Japan

Yoshikazu HASEGAWA, Itsuro OSHIRO
and Tomohide NOHARA

I 緒 言

沖縄島の島尻から鹿化石が発見され、松本彦七郎博士 (MATSUMOTO, 1926) が報告してから琉球列島と大陸との接続問題が大きな話題となった。徳永重康 (TOKUNAGA, 1936)、大塚弥之助 (1941) らが宮古島から象化石を報告した事により、大形陸上動物の重要性は一層認識がたかまつた。徳永・高井 (1938) は伊江島の鹿類化石を研究し、琉球列島に陸上古脊椎動物が存在したことを決定づけた。

琉球列島の鹿類化石は松本彦七郎の記載した2種、*Muntiacus astylodon* と *Cervus (Rucervus) riukiensis* のタイプが不完全であったため混乱が起きた。徳永重康・高井冬二 (TOKUNAGA and TAKAI, 1939) は伊江島から得られた大量の標本を整理して、*Muntiacus astylodon* (左下顎骨) と *Cervus (Rucervus) riukiensis* (角片) は同じ種の別の部分であり、しかも中国から報告されている *Metacervulus* に属するとした。*Metacervulus* は分類上キヨン類に入るが、我々の採集標本から、むしろ鹿類の形質を備えていることから *Cervus astylodon* となし、これをリュウキュウジカと呼ぶのがふさわしいことを指摘した。ところが、このリュウキュウジカに属しない形質の動物が別に存在することが明らかになった。これは、キヨン類に属するもので、リュウキュウムカシキヨンおよびキシャバムカシキヨンと呼んで区別した。また、宮古島など小範囲に分布するミヤコノロジカは古くから知られている (OTUKA, 1941, OTSUKA, 1973) ものである。

これら偶蹄類の形質的特徴については材料に乏しく、かつ不完全であったため詳細については充分な知識がなかった。

筆者等は、過去10年余にわたり標本収集を心がけ、これらを解明するために努めてきた。とくに第1図にみられる地点からは量質ともに注目すべき化石群集を得ることができた。総数一萬点余りの部分骨を扱うことにより、リュウキュウジカとリュウキュウムカシキヨンの2種の骨格復元が可能となり、ミヤコノロジカの頭部の復元ができた。よって、簡単にその概要について記しておくこととした。

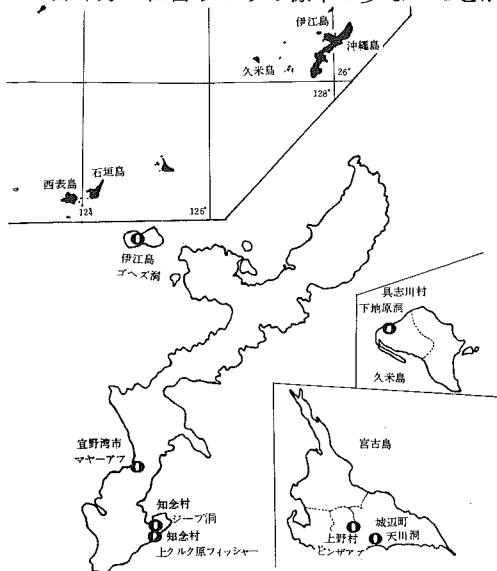
* はせがわ よしかず 横浜国立大学教育学部地学教室

** おおしろ いつろう 沖縄県立博物館

*** のはら ともひで 琉球大学教育学部地学教室

当該骨格の復元の可能性がでてきたのは伊江島のゴヘズ洞窟の遺骸群集発掘がきっかけとなった。沖縄県教育庁文化課が組織して、1976年と1977年の2回（伊江村教育委員会、1977、1978）にわたり発掘を行なった。この時に収集した標本は概算で、リュウキュウジカ5600点、頭数にして609頭、リュウキュウムカシキヨンが1300点で120頭を数えるほどであった。すなわち、シカとキヨンの混合した群集としては県内ばかりでなく、日本で最大のものである。これを使用すればリュウキュウジカとリュウキュウムカシキヨンの2種の骨格を復元できると考え作業をすすめた。標本の分類、記号つけ、部分の仕分け作業は専門的な仕事であり、研究と平行して行なう必要があったために多大の時間を要した。

結果的には、ゴヘズ洞の標本は量は多いが各部分骨が完全でないものが多く、特定された個体の大きさに各部分が組合うような標本の少ないことが判った。



第1図 復元に使用した鹿化石採集地点

そこで、新たに久米島の下地原洞、沖縄島の知念村ジープ洞、宜野湾市マヤーアブの標本から不足分を補い、かろうじてリュウキュウジカとリュウキュウムカシキヨン各一体分だけの骨格復元を行うことができた。これらは決して完全なものとはいえないがその外見を知るにはさしつかえないといえる。ミヤコノロジカは宮古島周辺のみに限られ、標本数も少なく、骨格の復元は難かしいが、頭部については特長を知るには差支えない程度の復元が可能となった。簡単にこれらの問題について記録しておくこととした。

II リュウキュウジカとリュウキュウムカシキヨンの主要化石産地と地質的背景

i) 伊江島ゴヘズ洞

伊江島は沖縄本島本部半島の北西、およそ5kmに位置し、東西に細長い、面積23km²の小島で、大部分は海拔80m以下の平坦面下にある。島の東寄り中央部には海拔172mの城山（グスクヤマ）があり、高い尖塔を形成し、島の特徴となっている。洞窟は伊江島空港の西側に在り、海拔82mのゴヘズ山（グピズィ）の中央付近に形成されている。

地質は粘板岩、層状チャートおよび結晶質石灰岩を主とした中・古生代の伊江層（大城、1974）を基盤とし、琉球石灰岩が上にのる。ゴヘズ洞はこの伊江層を溶解して形成されたもので沖縄では珍しい。上洞と下洞に分れており、上洞のたて穴から入る。上洞の洞底の一端にある小さい穴が下洞に通じる。下洞は断層に沿って形成された構造型のもので、斜洞をなす。上盤と下盤の間隔は数10cmから1m程度でせまいが、その隙間を埋積したり、洞底に洗い出された化石が露呈していた。個々の化石の保存状態からみて、完全な標本は少なく、明らかに埋積の過程で、あるいは埋積後に洗い出されて再堆積する過程で磨滅、破損したと考えられるものが多い。化骨化の充分でない若年

令の個体が相当量あるとはいえかなり破損している（伊江村教育委員会、1977、1978）。

ここから産出した化石から推定される頭数はリュウキュウジカ600頭以上、リュウキュウムカシキヨン120頭以上からなり、圧倒的にリュウキュウジカが多い。しかも、両種とも若年令から老令まで、さらに落角から、頭付きのものまで様々の状態が観察される。このことから、この遺骸群集は一時に形成されたものではなく、かなりの年数を経た集積であることがわかる。この中に脊柱が連続して残っているものがみつかり、これらを基準に両種の骨格復元を試みた。

リュウキュウジカの復元にはゴヘズ洞のものが多く使われた。脊柱は下地原洞産頭骨に合致するものを選んだ。リュウキュウムカシキヨンは、頭骨は知念村上クルク原フィッシャーから、脊椎は知念村ジープ洞と伊江島ゴヘズ洞、四肢はゴヘズ洞のものが主体となっている。下肢は仙椎に良く合う骨盤に、あらかじめ組み合せの作られていた10対余の下肢の中から最も合った大腿骨を基に選んだ。上肢は厳密に適確性を判断する根拠は現在のところない。しかし、これは下肢との比較の上で、各部分骨があまり太すぎたり、細すぎないものを選んだ。喜舎場朝敬氏が糸満市国吉から採集したという、唯一のリュウキュウジカの幼体一体分（完全ではない）があるが、成長段階を追跡できるようなまとまった個体の材料がほとんどないために現時点で、確固たるプロポーションを割り出すことができない。リュウキュウムカシキヨンでは全く産出していない。

一方、リュウキュウジカとリュウキュウムカシキヨンの分類学上の位置を決定するための比較種が完全な標本から成立っているわけではない。したがって、リュウキュウジカあるいはリュウキュウムカシキヨンについては暫定的なものとせざるを得ないのである。ミヤコノロジカはノロジカが比較材料となるために前者のような問題はないが、骨格を復元するための化石が少なく、今のところ全骨格の復元ができる見込みがない。

ii) 久米島下地原洞

久米島は、那覇の西方およそ80kmの所に位置し、地質的には新第三紀の火成岩類と第四紀の琉球石灰岩層から構成されている。安山岩を主体とした火成岩類は、島の主要部分を占め、琉球石灰岩層は島の西端と属島の奥武島・奥端島などに局部的な分布をしている。石灰岩層は、海拔50m以下に分布し、岩相の相違によりヤジャーガマ石灰岩と大原石灰岩の二層に区分（大城、1976）されている。

下地原洞は、ヤジャーガマ石灰岩中に形成されており、開口部の海拔高度は約40mである。主洞方向はN45°W、洞幅は最大10m、天井高は約8mで、洞長185mの吸込型横穴である。落盤による巨岩盤が散乱する。厚い粘土が堆積し、川が洞内を流れている。

洞の主要出入口は、風葬墓として利用したため埋積され、開口部は狭く（50×50cm）なっている。下り型式の洞口から約5m入った洞内の東側壁面には多数の保存の良い鹿化石が付着し、さらに壁沿いの洞床にも厚さ50cm以上の化石包含層が堆積している。化石包含層は厚さ10~15cmのフローストーンにおおわれており、粘土分が溶脱した粘性の低い暗褐色粘土からなる。化石の保存状態は非常によく、また化石にはふるい分けがあり、鹿の頭骨が集中して出土する。この化石層は、洞床から約1.5mの洞壁に化石が付着していることから判断して、かつては2m余の厚い堆積層を形成していたものと推察できる。

復元したリュウキュウジカの頭骨と角および骨盤はこの洞窟産のものを使用した。

iii) 知念村ジープ洞

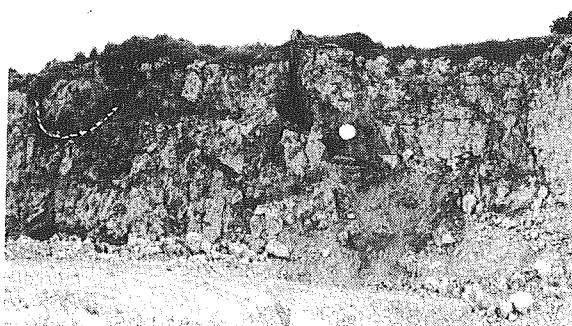
洞は、沖縄本島南部知念村にあり、本県では最も高度の高い海拔 150m の石灰岩台地上に形成されている。この台地上には親ヶ原洞穴群と呼ばれ（山内ほか、1978）るほど洞窟が多い。シルト質粘土を主体とした島尻層群を基盤とし、更新世中～後期の琉球石灰岩層がそれを不整合におおう。この地域の洞窟は、その不整合部に形成されたものが多く、洞内に水流を伴い、厚い粘土層が堆積しているのが特徴である。

ジープ洞は、開口部を北にして南北方向に発達した全長約90mの吸込型洞窟である。洞内は落盤が激しい。平均洞幅 8m、天井高は 3 ~ 8m で県内でも規模の大きいものの 1 つである。土地の人々は、この洞をシカヌフニー洞（鹿の骨洞）と呼び、以前から鹿の骨を産することで知られていたようである。洞床には石灰岩礫が散乱し、入口から約50m 奥に多量の化石を含む粘土層が堆積している。この堆積層は石灰岩角礫や鍾乳石片を含む粘質な赤褐色粘土からなる。洞壁に付着するように堆積し、厚さは約3mである。化石は、この粘土層の中央部に密集し、比較的下部は二次生成物で固結している。化石包含層は、この地点にのみ分布するが、化石は同地点付近の天井壁にも多数付着している。この事は、かつて堆積層がもっと厚かったことを推測させるものである。

この洞からは、リュウキュウジカとリュウキュウムカシキヨンの両種が多数産出しているが、今回の復元ではリュウキュウムカシキヨンの脊椎骨16点が使用された。

iv) 上クルク原フィッシャー

沖縄本島南部の知念村知念 1104 番地に在る。海拔 110 m の高さに位置する琉球石灰岩採石場の切端に現われたフィッシャー堆積物である。この地点の茶褐色粘土層からリュウキュウジカ、オオヤマガメ、ヘビなどが多産し、若干のイノシシが産出している。旧洞窟と考えられる北壁（第2図参照）に形成されたトラバーチンの中から角付きのリュウキュウムカシキヨンの頭骨が発見された。



第2図 知念村上クルク原フィッシャー化石産地
〔鹿の角つき頭骨産出地点(中央の白い丸印),
化石多産地(点線)〕

このような角付き頭骨は他の産地からは一点も産出していない。リュウキュウムカシキヨンについて考察する場合に当標本は最も重要なものである。リュウキュウムカシキヨンは当該標本を基本として復元した。角幹は宜野湾市マヤーアブの標本を参考にして先端の欠損部を補なった。脊椎は頸椎（1 ~ 7）、腰椎（2 ~ 6）、仙椎など16点は知念村ジープ洞窟産のものを使用し、他の部分は伊江村ゴヘズ洞窟産のものを使用した。これらは各関節がほぼ順当に連結するものであり、大旨満足できる。

v) 宜野湾市マヤーアブ洞

沖縄本島中部、宜野湾市真志喜の南東海拔約50mの崖斜面に開口している。地形は海拔10m以下（I面）、15~20m（II面）そして60~70m（III面）の3段丘面を区分できる。とくにII面とIII面は、落差45~50mの段丘崖となり洞窟はその崖斜面部に形成されている。すなわち、マヤーアブ洞は琉球石灰岩体中に形成されているもので、ここでは直接石灰岩層の基盤は確認できない。しかし第III段丘の基部付近からは湧水があり、島尻層群との不整合部に近いことが推測できる。

洞の主洞方向は西北西-東南東で、洞長約120mである。洞口から30m付近までは、落盤による石灰岩巨礫が占め、洞奥に向って含礫粘土、赤褐色粘土層へと層相変化がみられる。堆積層は洞奥へ向かって次第にうすくなり、洞床からの堆積物表面高度も高くなる傾向がある。化石は、このような洞奥の粘土層から採集された。

この洞からはリュウキュウムカシキヨンのはば完全な角化石が産出した。復元には直接使用することはなかったが、原型となった知念村上クルク原標本の角の欠損部を補修する際に重要な参考資料となった。

部位	リュウキュウジカ	リュウキュウムカシキヨン	部位	リュウキュウジカ	リュウキュウムカシキヨン
頭骨	下地原洞	上クルク原	手根骨	ゴヘズ洞	ゴヘズ洞
頸椎	1-7 ゴヘズ洞	1-7 ジープ洞	中手骨	"	"
胸椎	1-13 "	1-13 ゴヘズ洞	骨盤	下地原洞	"
腰椎	1-6 "	1ゴヘズ洞 2-6ジープ洞	大腿骨	ゴヘズ洞	"
仙椎	1-3,(4なし) "	1-4 ジープ洞	脛骨	"	"
肋骨	1-12 "	1-12 ゴヘズ洞	踵骨	"	"
肩甲骨	"	"	距骨	"	"
上腕骨	"	"	足根骨	"	"
橈骨	"	"	中足骨	"	"
尺骨	"	"	指趾骨	"	"

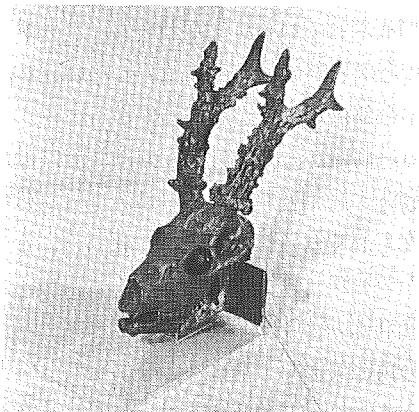
表1 リュウキュウジカおよびリュウキュウムカシキヨンの骨格復元に用いた標本の产地一覧

III ミヤコノロジカの产地と地質的背景

i) 宮古島城辺町天川洞

宮古島城辺町友利から南西方向へ約500mほどの場所に天川洞が琉球石灰岩体中に開口している。洞口は10×10mの堅穴で、深さは18mある。下洞はN 50°W方向に発達しているが、地下水のために水没しており内部の状態は判らない。この地下水は古く飲料水として使用されていたも

ので、道路は左側壁面に作られている。洞口の反対側中段には友利層（長谷川他、1973）と呼ぶ石灰角礫岩ないし褐色粘土層が堆積している。中段のものはあまり固結していないが、壁面のものはトラバーチンで固結され、化石の採集は難かしい。



第3図 *Capreolus miyakoensis* OTSUKA
ミヤコノロジカの頭骨

かつて、ここから *Capreolus miyakoensis* や *Metacervulus astylodon* の2種のシカ類がでていると考えたが、それは後日の検討で *Cervus* すなわち、*?Metacervulus* の確かなものは認められないので *Capreolus*だけといえそうである。

C3 地点から採集した角を基に新種ミヤコノロジカ *Capreolus miyakoensis* が記載された。
(大塚、1973)

ii) 上野村ピンザアブ(洞)

宮古島上野村豊原の上野小学校北方約750mの所に位置する。そこには、北北西-南南東方向に脊梁が発達している。東側は高い断層崖を作っているが西側は僅に傾斜するだけの平坦地である。この中に形成された浅いドリーネの底に発達した洞長140mの横穴である。洞口はおよそ海拔50mの高さにある。洞は琉球石灰岩層中に形成されている。岩相は中～粗粒の有孔虫殻砂を基質としたサンゴおよび石灰藻類の化石を多く含む湿度の高い洞で、洞底には厚い残留粘土が堆積している。粘土層には保存の良い鹿化石および多数のケナガネズミ、ハタネズミ、イノシシ、人骨など数種類の絶滅動物を含む。この洞から産出した角および頭骨の部分より頭部の復元を行なった。この角は非常に大きいもので現生種で比較できるものがない。骨格の大きいものではケラマジカほどある巨大個体も含まれている。全体に数が少なく、しかも、大きさに差があるため骨格復元をする段階にない。したがって今回はミヤコノロジカは頭骨だけにとどめた。

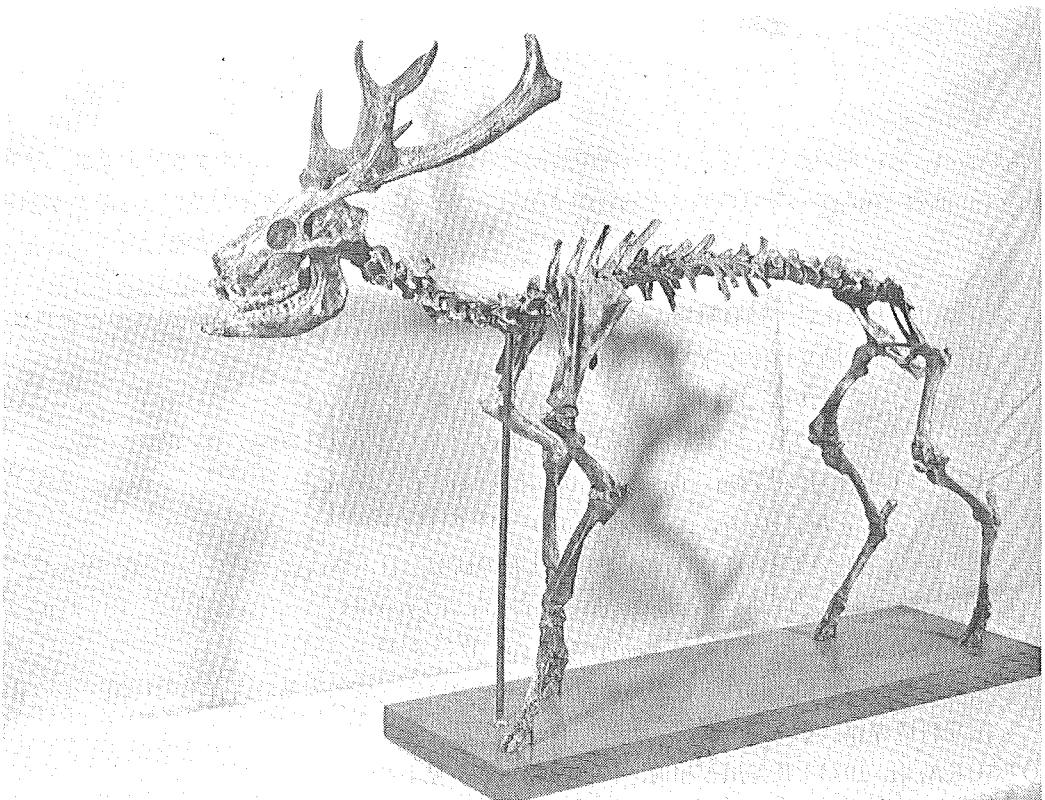
以上、リュウキュウジカ、リュウキュウムカシキヨンおよびミヤコノロジカについて、復元に用いた標本の産地の概要と使用された部分について概要を述べた。詳細な記載などについては稿を改めて行なう予定である。

おわりに

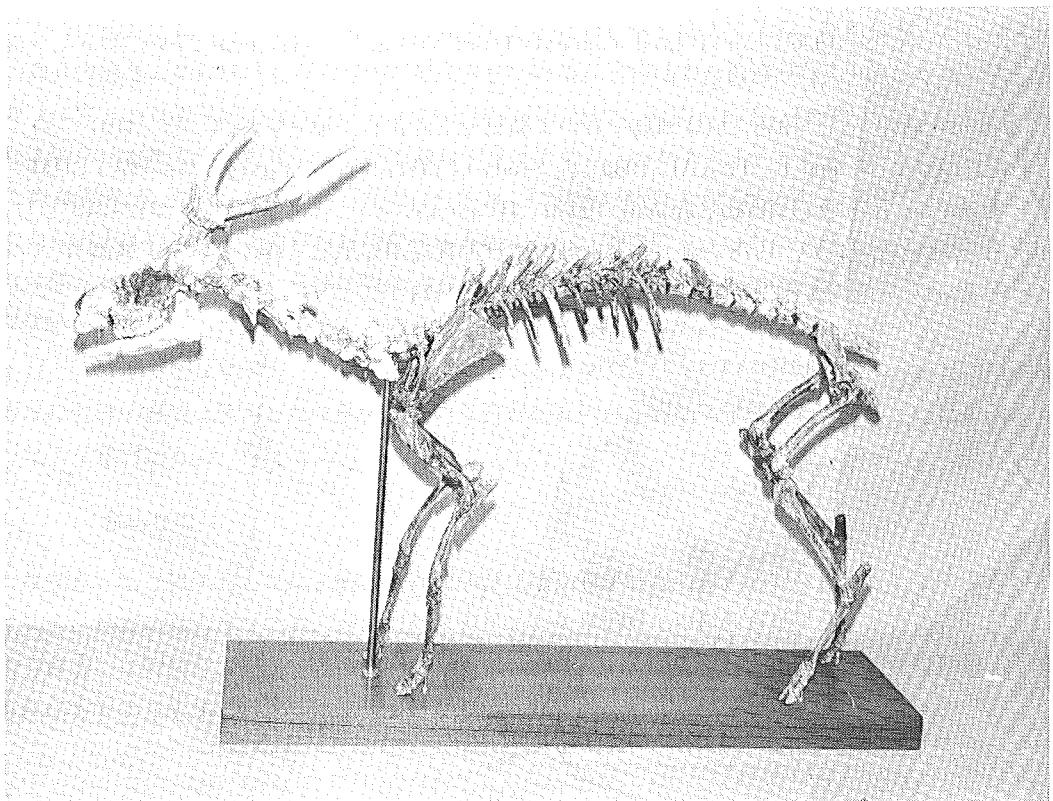
復元を行なうにあたっては、直接には沖縄県立博物館が計画した。必要な標本を収集するために文化庁、沖縄県教育庁文化課、伊江村教育委員会、久米島具志川村教育委員会、宮古島の城辺町教育委員会、上野村教育委員会各諸機関の関係者の皆さん、大山盛保、大山盛穂、喜舎場朝敬、下地恒輝の方々から永年にわたり御尽力をいただいた厚く御礼申し上げます。

文 献

- 長谷川善和・大塚裕之・野原朝秀, 1973: 宮古島の古脊椎動物について (琉球諸島の古脊椎動物相—そのⅠ)。国立科博専報, (6): 39—52
- 伊江村教育委員会, 1977: 沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査—第1次概報—: 1—31
_____, 1978: 沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査—第2次概報—: 1—56
- MATUSMOTO, H., 1926: On some new fossil cervicorns from Kazusa and Liukiu. *Sci. Rep. Tohoku Imp. Univ., Ser.2, (Geol.)*, 10 (2): 21-23.
- 大塚彌之助, 1941: 琉球列島に於ける哺乳類化石の研究。日本学術振興会、第3輯: 17—27
- OTUKA, Y., 1941: On the stratigraphic horizon of *Elephas* from Miyako Is., Ryukyu Islands, Japan. *Proc. Imp. Acad., Tokyo*, 17: 43-47.
- 大塚裕之・長谷川善和, 1973: 石垣島産の化石鹿について (琉球列島の古脊椎動物相—そのⅡ)。国立科博専報, (6): 53—58.
- OTSUKA, H., 1973: 長谷川善和他, 1973, 43~45を見よ。
- 大城逸朗, 1974: 沖縄本部半島北西部伊江島の地質, 沖縄生物学会誌, (9): 25—33
- 大城逸朗, 1976: 久米島の地質—特に琉球石灰岩と完新世イリビシ石灰岩について—
沖縄県博紀要, (第2号) 1—17
- TOKUNAGA, S., 1936: Fossil land mammals from Riukiu Islands. *proc. Imp. Acad., vol. 7, (8)*: 255-257.
- 徳永重元・高井冬二, 1938: 琉球列島において発見せる鹿化石, 地質学雑誌, 45 (470)
- TOKUNAGA, S. and F. TAKAI, 1939: A Study of *Metacervulus astyloodon* (MATSUMOTO) from the Ryukyu Islands, Japan. *Trans. Biogeogr. Soc. Japan.*, 3 (2): 212-248
- 山内平三郎・新垣義夫, 1978: 南・北大東島および沖縄島南部地域に於ける洞穴実態調査、沖縄県洞穴実態調査報告Ⅰ, 沖縄県教育委員会, 19—74



Cervus astylodon(MATSUMOTO) リュウキュウジカ全身骨格



Dicrocerus sp. リュウキュウムカシキヨン全身骨格

〈博物館文化講座100回記念講演〉 博物館の歴史展示について

坪井清足*

一介の考古学をやっている人間が、このような表題の話を引き受けるようになったかのいきさつを、若干ご説明した方がわかりやすいのじゃないかと思います。私、実はただ今のご紹介にありましたように、ほぼ30年間程、奈良県の今から1200年程前の都でありました平城宮の発掘ということを中心やってまいりまして、昭和40年（1965年）に文化庁記念物課へ参りました、全国の都道府県の方々といろいろな文化財の特に埋蔵文化財の保存という問題にとりくんでまいりました。

戦前からというか早くからそれぞれの史跡を保存するということが大正8年（1919年）にできました。史跡名勝天然記念物保存法という法律によって、各地の由緒ある所を史跡として残すというようなことをやってまいりまして、私の30年間程発掘調査をしております平城宮跡というもの、その史跡の一部です。そういうものを保存するということをやってまいりますと現在の沖縄でも城とか、貝塚とかいくつも史跡に指定されたり、あるいはまだ史跡にされておらないものも、やはりこれからも保存していくなければならないという問題があるわけですが、そういうものは現在生きた姿で残っているものではなくて、そこは、かつて人間の営みが行われた場所でありますけれどもそれを作った時代の生活が、今では変化してしまって、廃墟になっていることが多いわけあります。

たとえば、県立博物館の南に隣接する首里城に致しましても明治以降廢城になり、沖縄戦では地下に軍指令部がおかれたため、米軍の猛攻をうけ灰尽に帰し、その後琉球大学が設置されました。最近又琉球大学が移転しましたので、今後どのように保存していくかという事が県民の皆様にも非常に大きな関心をよんでいると思います。首里城のような城をどういう形で、つまり500年余の長期にわたってつかわれ、政治・経済の中心的役割を果した城であったから、残さなければいけないのだということを示すためには、やはりその遺跡そのものをいろいろとみせていかなければならない。一般市民の方々にこういうものだとわかるようにして保存しなければならない、という問題の外に、やはりそれを補足的に説明する遺跡における博物館的なもの、あるいは資料館と現在よんでいるものもあるわけですけれど、そういうもので現地の地形とその他残っている石垣とか、いろいろな貝塚の貝層だけでは素人になかなかわかりにくいので、そこから出た成果をもう少しありやすく説明しなければ、一般の人に何のためにこういうものを保存するのかという意義をわかっていただけにくいのです。ということで、掘り出したものをどうやって一般の方々にご理解いただけるかということから、博物館的な展示というものにたずさわるようになってまいりました。

ちょうどそのころ、日本の博物館の中に欠けているものとしまして、この歴史的な展示をする博物館が日本になかったので、歴史博物館というものを作ろうという話が出てまいりました。今日の

(* つばい きよたり 奈良国立文化財研究所所長)

手元にありますレジュメの中にも若干触れていますが、そういうものの準備のために私は昭和42年（1967年）にヨーロッパを1カ月程視察旅行させてもらいました。

そこでソ連と北欧諸国とギリシャまで1カ月程でヨーロッパを南北に縦断致しまして、いろいろな博物館を見学致しまして、そこでの歴史的な展示をいろいろとみてまわったわけです。私が昭和42年（1967年）にそういうものを見て参りまして、その報告のレポートでいろいろ資料を提出したようなもの、いくらか参考にしていただければと思っております。そういう調査にはじまった歴史民俗博物館が来年の3月の中頃に、千葉県の佐倉市でオープンすることになっておりますが、この事前調査にかかわりをもつたことで、歴史的な展示というものに私が関係を持つようになったわけです。

博物館には今までに歴史展示があるのじゃないかと、おっしゃる方もおります。しかしどうも日本での博物館というものの方をみておりますと、明治初年に、博物館が政府によって作られ始められました。日本の考古学の一番最初に科学的な発掘をやったお雇い外人の教師の一人でありましたアメリカ人のエドワード・モースが、大森貝塚で石器時代の遺跡を発掘したわけですが、そのモースが博物館の開祖の一人であります。モース自身は生物学者でありますので、自然科学の博物館というものを手懸けたというか、その基礎をつくったわけであります。その後明治政府は博物館というものをいろいろな形で運営いたしましたが、その方針が現在上野にある科学博物館という形で、文部省の所管している博物館ができあがっております。

最初、自然史も人文系のものも全部一緒にやっていたわけですが、その中から帝室博物館というので、歴史と美術というものを中心にした博物館が独立しました。これはずっと宮内省が所家し、やっておりましたので、帝室博物館という名が残っていたわけで戦前はずっとあったわけです。この博物館が、実は関東大震災で建物が大きく崩壊しました。それを再建するという形で、どういう博物館を作るかという時に、ざっくばらんに言いますと、研究者の派闘的な争いになったような面もあるわけですし、美術史を専攻しておられる方と歴史を専攻しておられる部門とがその当時の博物館にあったわけですが、いろいろと大論争がありました。その結果、上野に再興する博物館は美術史、美術の歴史、わが国の国宝といいますか、国の宝として指定しております美術品を中心とした博物館をつくることになったのです。一方歴史はそれとは別の歴史を中心とした独立機関をつくることが昭和のはじめに決まりました。それですから現在上野にあります東京国立博物館は、わが国の美術の歴史をふりかえさせるための博物館だということになりました、美術作品を鑑賞するという流れが非常に強くなってきたわけです。

ところが、博物館というのは、外国の博物館の歴史をみましても、やはりそういう鑑賞的な美術品を国王だとか貴族が集めたものを、集めるというのは一生懸命珍しいものを集めるというだけではなくて、せっかく集めたコレクションを人々にみせたがるといいますが、みせびらかすということが、気持の中にあるわけでして、そういうものを各国の貴族や王族といいますか、国が美術を展示する博物館というものに変わっていくわけです。現在諸外国では、このようなものを主として美術館とよんでいるわけです。

日本の場合はこのような美術館的なものを博物館という名前でよんでいまして、昭和の初年まで組織として東京国立博物館の中にありました歴史課をつぶしてしまいました。

ところが昭和30年（1955年）代になりました、日本に歴史博物館がないのはおかしいということになりました。初めは民俗学の人達が独自の博物館をつくりたいという要望が出てきたわけですこのような経緯で博物館の中に、一つ歴史的なものを理解し、その土地その土地の歴史を理解していただくための博物館をつくろうという気運がおこってきたわけです。そうはいいながら博物館には、主として美術の歴史を勉強した学芸の方が勤務しておられますので、どうしてもまだ現在の全国の博物館の中での歴史展示というのは、なにかの目玉商品を中心にして鑑賞してもらうような態度が、なかなかとりきれないというところがあるわけです。

ところが、これはなにも日本だけのことではありませんで、先程言いましたようなヨーロッパを十数カ国みてまわりまして、痛く感じました。ヨーロッパにおいてもフランスとかイタリーとか、とくに南欧の地域の博物館というのは、歴史的にもギリシャ・ローマという美術作品がいっぱいある時代を、その土地が経ていますから、そういう時代の作品もいっぱいあります。さらにルネッサンスというものがイタリーを中心に起りまして、フランスからさらに北欧へ波及していくわけですけれど、ルネッサンスの作品は非常に大量にあって現在でもヨーロッパの芸術の歴史を勉強するところいうものが基本になって並べられています。そうすると博物館にはそういうものが大量に展示されておって、美術の歴史を知るには便利な展示がされているということになるわけです。

ところが一方で、北欧諸国には古代から中世あるいは近世の初めの、歴史的な流れからいいますと、北欧にルネッサンスの時代はありませんないわけです。なくていきなり近代へとびこんだ国だと言ってよいわけです。そうすると例えば北欧の中でもスウェーデンのストックホルムにあります国立博物館をみて、これはルネッサンスから以後の近代的な美術を並べた部屋もありますけれど、土地の作家というものが（これは皆さんがご承知の作家もおられますけれど）イタリーやフランスあるいはオランダあたりと比べて、ものの数に入らないくらいの作家しかいないので、貧弱な展示物しかない。あるいは南欧に比べて北欧は乏しいと言えると思います。そういう国で、美術以外の歴史を知るための博物館というものは非常に発展しています。これからスライドで、若干みていただくわけでありますけれど、展示の中に優れた展示があります。それはなにかというと、美術品でもそれぞれの作品を鑑賞させるという形があるわけですが、歴史の展示というとやはり古文書であるとか、その他の歴史的に使われた道具類、あるいは古代・中世・近世の庶民の使っていた道具類などが、展示の対象になるわけです。歴史の展示というのは、その展示物の中にはそのものだけでみたら、美術作品とちがい、鑑賞に耐えられるものでもなんでもない物もあるわけです。だからそのものがこういう意味があって使われたのですよということを、わかるように展示しなければ、たんにそれひとつをポンとおいてそこへ学名を書いていただけでは何のことかわからないのです。最近できた日本の博物館を拝見しながらも、例えば石器時代の展示物があるところへ貝塚から貝ができるというので、貝殻が若干置いてあります、それに難しいラテン語の学名が書いてあって、ただけの展示がまだまだ横行しているようあります。

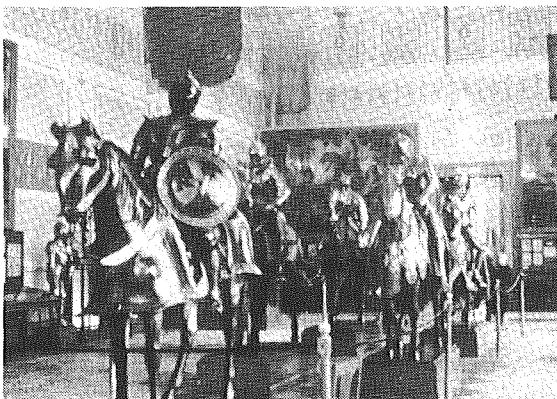
そういうのでは一般にこられる観客の知識ではそれがどういう意味をもっているのか、なかなかわかりにくいわけであります。だからそういうものがむかしの生活の中でどういう意味を持っているのかを、わかるような展示に、どうやったらできるのか、ということあります。

ところが博物館の展示といいますと、日本の場合にはかならず何百字かの解説を一生懸命そこに

書いて並べるわけです。その解説文を読めばその場限りではわかったように——それもわかりにくい学術用語を使ってあってわかりにくいことが多いようです。もしやさしく書いてあっていったんその場ではそれを理解したとしても、例えばこの博物館でも展示する場所が数部門あるわけですから、題せんやら説明板を読んでいけば少なくとも、この博物館に入ってから出るまでに、50以上のあるいは100以上のそういうテーマを頭に入れなければならぬのです。そんなものを最初から最後まで読んでいって出てみたら、最初に読んだはずのも、よっぽど印象的なものでない限りはすっと抜けてしまうのがあたりまえじゃないかと思います。まして小、中学生の諸君は一生懸命ノートしているかもしれません、本当にそういう文字でいくら書いてもなかなかわかりにくい。これはこういう風に使われたものだというものを、展示してあるものに語らせなければわかりにくいわけです。

ところが今までの美術的な鑑賞を主とした博物館をやってこられた方は、必ずしもそういうことに慣れていない。私ども先輩から考古的な展示物というものに対して汚れものということをいつもいわれました。美術史の研究者にしてみればこわれた茶碗やなべのかけらであり、それはがらくたであるとしか思われていない。事実小さな土器のかけらなどはそうとしか受けとれないようなものなんです。だからそういうものを、どういう風に展示していくかということにはいろいろな工夫がいると思うわけです。

これから少しスライドを無秩序ではあるわけですが、みていただきます。



① 騎馬武者行列（エルミタージュ博物館 ソ連）

① 写真はレーニングラードにあるエルミタージュ博物館というソ連で一番大きい、世界中でも屈指の博物館である。ここは展示室が総計五百数十室ある。普通の国の博物館で走るなんていうことは以ての外である。しかしエルミタージュ博物館においては、半日しか余裕がない場合、部屋から部屋へ走って見なければ全てを見られない程大きなところである。

これは中世の騎馬武者をズラッと並べおり、いかにも一般的な人々に歴史の展示はこういう

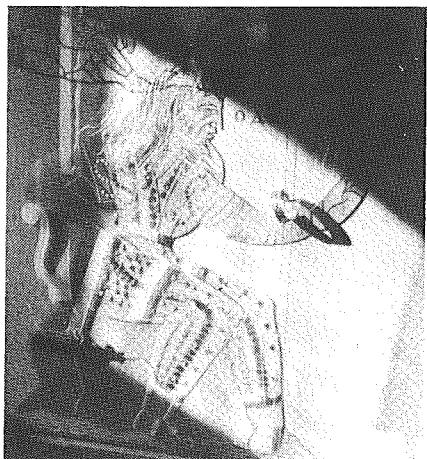
ものだと思わせるような展示物の代表的な例として、こういう甲冑類を並べたもの。諸外国でも日本でもこういうものをいくつか並べていると思うが、いかにも馬もその上に乗っている人の形もわかるような、歴史展示と思えるような常識的な展示の中では大規模なものとしてみていただいた。

このうしろ側の室を華やかに飾ってあるのは、ロマノフ王家の宮殿を利用しているからである。シャンデリアなどがそのままに保存されている。私自身はこの展示を感心しているわけではないが歴史展示として一番わかりやすいものというのでトップにあげてみた。

② 写真は背面に地図が書いてあって、これは黒海の北のステップ地帯に、今から3000年から2500年位前にそこにスキタイ人とよばれる遊牧民がおり、そこから黒海の南に植民地を持っていたギリシャ人の植民地からスキタイ人が手に入れたギリシャ6世紀から5世紀くらいの古典時代よ

り古いアルカイック（古拙）時代の作品がいろいろと出土している。そういうスキタイ人の墓から出てくるものを、並べている。右上の舌を出している、ゴルゴンの顔を浮彫りにした鎧はギリシャの鎧の作品としてはもっとも優秀なもので、ヨーロッパでもそれだけの古典以前の優秀な作品はないかなかない。分布図と並べて、こういうものがこの地方から出ますということを示している。

②
（エルミタージュ博物館）
スキタイ人の服飾



③ 写真は同じく金ボタンを配列し、腕のところに金製の腕輪がはめてある。透明のプラスチックでこの時代のスキタイ人の形をあらわしている。この人の形は拳大よりもうちよっと大きい金の壺の脇部に浮彫でスキタイ人の風俗があらわされたものからとったもので、その壺には、ギリシャ人がスキタイ人に頼まれて、スキタイ人のその当時の風俗を非常に写実的に描かれている。その浮彫にこういう髭をはやした男が腰掛けているものがある。その頃そういう人達がつけていた飾り金

具や洋服につけていた飾りを、実際に墓から出土したもので表現している。そうすると、これがこのピンのこういうのがあるとか、あるいはこういう所に縫いつけたボタンだというのは一つ一つ棚に乗せてみせるよりはもっと具体的にこれはどういうふうに使ったのかがわかると思う。

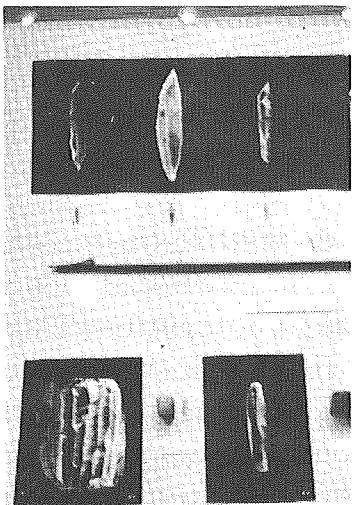
④ 写真は同じスキタイであるが、頭の冠をつけた飾りと首飾り、バンドの飾り、それからバンドからぶらさげているいろいろな物、腕輪、剣の柄などのようなものがこういう形でつかわれたということを示したものである。

日本では、どこから出たもの、何世紀のものだというような解説があるけれど、この博物館ではほとんど文字が書かれていないで、部屋にこういう時代というようなことがあればわかる。この左端の金製のものは、これは矢を入れて腰にぶらさげるゴリトス、日本語で言えば「胡籠」である。その他いろいろな馬具が出ている。

⑤ 写真は馬の「はみ」とか、馬に使ういろいろな飾りの金具や、道具類があって、馬の絵がかけてあって、それに、こういう金具が使われるのだ、という絵が示してある。

私は日本のことしか知らないで、初めて外国に行ったので、この辺も非常に斬新な展示をしてあると思い、最初の頃は驚いたが、これにはもう少しこれの元祖になるのがスウェーデンにあることがわかった。

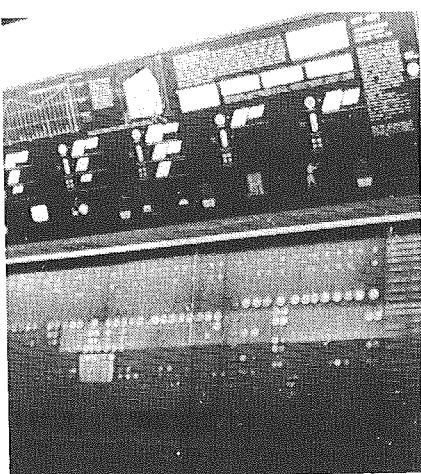
⑥ 写真は同じエルミタージュ博物館の展示であるが、もう少し新しい歴史時代になってのもの。この辺は金具ですが、ここにこういう丸太の一部分が描かれてあって、物がくくりつけてある。例えば15世紀位の、現在のロシアの国ができはじめた頃の、ノブゴロドのような所では、都市の遺跡が発掘されている。そういうものが、こういう所で若干示されているが、この点になると、先程の展示よりは絵が多くてわかりやすいけれど、あまり上等な展示ではなかったように思う。エルミタージュの中にも先程の騎馬行列のような古風な展示から、近代的に進んで改良されている部分までが、全体としてはもう一つすっきりしない。



③ 細部を見せる工夫
(スエーデン国立歴史博物館)

それから、ここに写真で部分を拡大している。石器の実物は小さすぎてわかりにくいくらい、それを拡大してみせている。それは細石器の石核だから、ここに縦に縞模様になっている。この上をポンとたたくと剥片がとれるわけである。その剥片をここに置いてあるわけである。その剥片を木の柄の先にこういう様に埋めこんで槍として使うのだと示してあって、小さなものでもどういうようく使われたかがわかるように説明されている展示の一つだと思う。

④ 貨幣の展示
(スエーデン国立歴史博物館)



展示している。他でもグラフを入れて説明をしたりするようなことが若干あるけれど、この下のお金がその時代にはこれ一つで今の人もわかる殻類とかそういうものと比べてどのくらい買え、その当時どういう値打として使われていたかが非常にわかりやすく展示してあった。

流通経済に関してはこういう工夫をして並べるとよくわかると思う。ただ銭であるとか、お札であるとかものを並べただけでは、見る人々にさっぱりピンとこない。

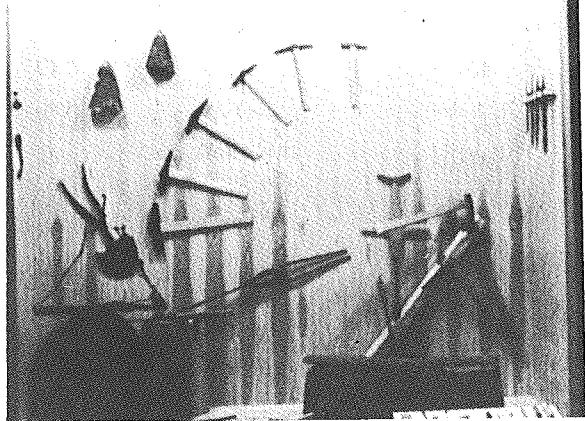
⑩ 私が感心したのは、鉄器時代の展示でハンマーがこういうふうにすっとふりおろされる形で下に金てこがおかれ、やっとこで鍛造している風景、あるいは大工道具を入れる箱だとか、のみとかいろいろな道具類が展示している。これだとこれは金槌であると、こういう道具をつくるための動作まで表わしており、これだけで説明を書かなくてもこのものがどういうふうに使われたものということが非常によくわかると思う。

⑦ これからしばらくは北欧のスウェーデンのストックホルムにある歴史博物館を説明したい。その中味であるが、写真は石器時代の北欧のここに石器がいろいろと置いてある。それからこの写真の方は、石で作った鉛とかが置いてある。

⑧ さっきみたのは展示物がカーブしていて、あれだとガラスの反射が屈折するので、こちら側の見る人も照明をうまくやれば、人間の像がガラスに写って中がみえにくいとうことを防げるわけである。

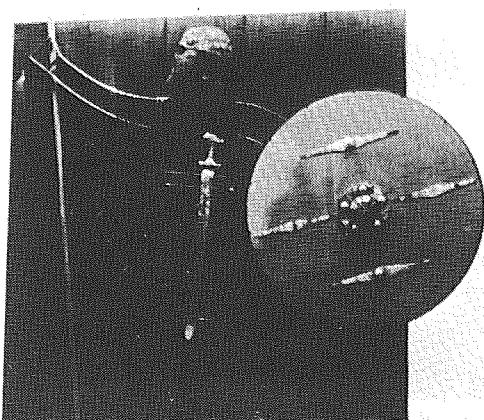
⑨ 写真はそのスウェーデンの博物館でみた古銭の展示室である。ヨーロッパ各地の博物館はその国のあるいは外国のお金のコレクションを非常に大事にしている。メダルとコインの展示というのはどの博物館にもあるわけだが、物だけ並べた古風なやり方しかやっていないところに比べて、ここの場合には金貨・銀貨・銅貨を一つの時代のものを一つのパネルに並べて、その上にいろいろ殻物や牛などをパターン化したもので、どの錢でどれだけの品物が買えたかを、非常にわかりやすく

日本では棚に置き金槌という難しい字が書いてあるだけの場合が多い。このように物に動きを与えて、物に語らせるという手法が非常に斬新なものと、私は印象づけられた。



⑤ 動きのある展示（スエーデン国立歴史博物館）

板がねで作った抽象的な人間にそれらの武器を持たせた状況で、模造品が取りつけてある。このように展示すると、それは盾の飾り金具だということをいくら細く説明するよりもかえって本当に小学生でも理解でき、こういうことにあまり関心がない人でも、そういう風に並べることによって「あっ、ああいう風に使った。」と、よくわかるのじゃないかと思う。



⑥ バイキングの武人像（スエーデン国立歴史博物館）
骨は山口県の、土井ヶ浜という所で私共が掘った男性人骨で、胸から腹につきささっているこの部分からサメの歯の矢じりや、石鎌が十数個検出された。その体に当った矢じりのささっている方向から考えて、だいたいこうなるというのをやってみせ、写真のように一族の間で犠牲者だったような人が、墓に葬られている。

⑦ 写真は歴史博物館ではなく、ストックホルムにある中国を主とした東洋の美術館（遠東博物館）で、その美術館で見た情景は、この室の中には全然説明がない。この場合にはこういう品物をよく鑑賞しなさいという形で展示している。

ケースの下にある引出しを2つ程引出してある。これはこの引出しを開くと、そこに細かい説明

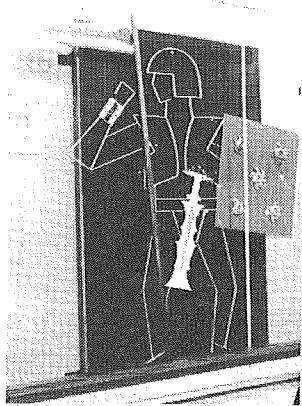
⑧ 写真は私がそれを真似して東京で、15年前「弥生人展」をやった。ここに石斧があり、斧の柄は出土品から似せてつくった。それを木の上にぐさっとうちこんだような状態で表現した。ところが最近できた博物館では、石斧に柄をつけて、これを持つ人間の手を腕の先だけ写実的につくって展示してある。私は手は余分で、動作さえ表わせばいいのじゃないかと思う。

⑨ 写真は同じスウェーデンの博物館で、出土した盾・兜・槍の先・剣の鞘じりの金具等を、この隣のケースに実物が並べている。

⑩ 「弥生人展」の時、私は巴形銅器、細形銅剣、鉄弋、銅の腕輪等を着装して展示した。その時東京の国立博物館の課長から、こんな貴重品を垂直にとりつけると困る。そういうものはケースの上に水平に並べるものだ。そんなことをするのなら借してやらないと言われ、だいぶ閉口した。けれどこうすると、今から2000年前の弥生人がこういうかっこうをしていたんだということがある程度理解できたと、後でたいへん評判になった。

⑪ 写真は同じ弥生人の展覧会の時、この

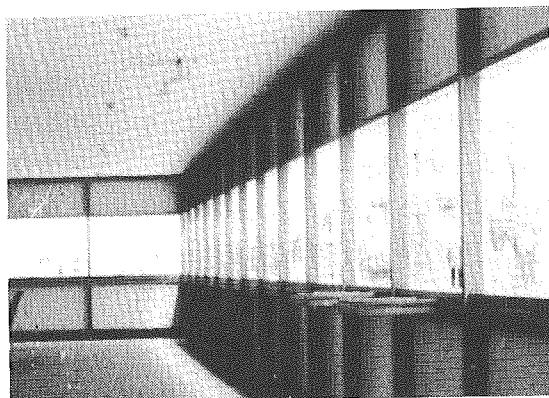
が書いてある。だから単なる鑑賞をする人はそんな引き出しをいちいち開けないでただ物を楽しんでいる。ところがもう少し詳しく調べたい。あるいはこれは何だろうと興味がある人は、この引き出しを出せばそこに詳細な説明書と、参考資料もここに入っていて、詳しくみることができる。詳しく知りたい人のために、徹底した展示をしているので感心した。



⑦ 「弥生人展」の武人（日本）

⑯ 写真は同じ東洋美術の博物館で、この下と天井にずっとレールがあり、これ1枚を引き出してみたら、掛け軸が掛けてある。これ全部がここへ引き手があり、これに作品がずらっと並んでいる。何十枚も並べて、これはストックルーム、倉庫兼鑑賞ということで、これはスウェーデンの前の国王が東洋美術に関心があって、大正14年（1925年）には千葉県で日本の姥山貝塚の発掘にも参加しており、朝鮮半島では慶州では金の冠等が出る古墳の発掘に参加された。この塚の名前をスウェーデン（瑞典）皇太子の発掘した塚ということで瑞宝塚という名前をつけた。

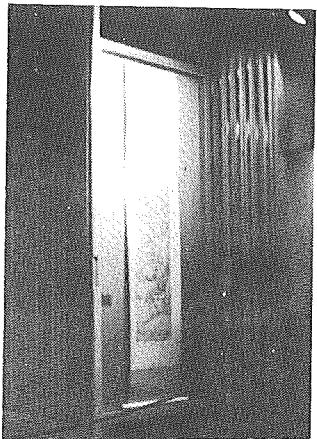
ところで国王が時々鑑賞に来る。こちら側に引き出してみたいものを引出して椅子にすわってゆっくりと鑑賞するというような設備が整っている。ところがこれに似たものは北海道の開拓記念館の地下のやはり一般のルートじゃなくて、下でもう少し詳細に見たいという人のために、これと似たものがつくってある。遠東博物館のレールは非常にスムーズにすっと出て、すっと入れるけれど、開拓記念館のは建具が安もので、ガタピシしなくちゃなかなか引っぽり出せなかったり、このガラスがペコペコでちょっと私もやってみたが、恐くて全部を見る気がしなくなった。やはり家具は北欧だと言われるだけのずいぶん上等なものであった。見ておわかりなように外国人は巻物をうまく巻けない、だらりとケース内に垂らしている。こんなことをしてはかえって絵の保存のためにはよくないが、これは西洋人が不器用なものだということを示している。右側に写っているのは長い引き出しでこれを引き出すと、ここは絵巻物がひらいたまま並べてあり、そのままみられるようになっていて、ちょっと日本人には考えつかないような展示方法をしていた。



⑧ 展示ケースと引出し（遠東博物館 スエーデン）

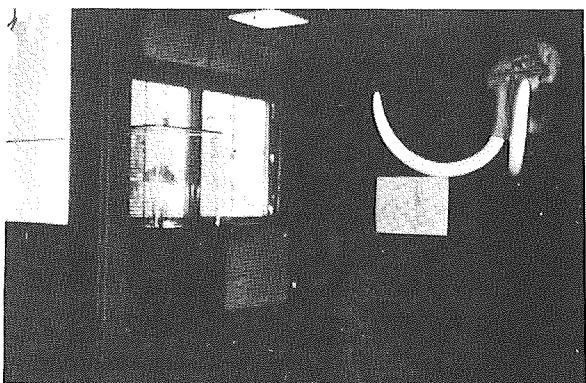
⑰ ここからドイツのものをみていただく写真は西ドイツの首府のボンにあるラインラント州立の一般的な歴史博物館、つまり総合博物館で、ここにマンモスの頭蓋骨が置いてある。このケースに入ってるのが、旧石器時代の世界で一番最初に発見されたネアンデルタール人の頭蓋骨そのもので、この場合はこのケースにピアノ線が入っており、（この写真では写っていないが）、このケースを動かそうと他の人がしたら、電流が通じて、じゃ

んじんと警報器が鳴るようにしている。それは別としてこの頭蓋骨の高さはネアンデルタール人の復元した背の高さを表わし、その向い側にマンモスの高さを表現してある。それはネアンデルタール人がたくさんマンモスをとり、食料にしたり、いろいろなことにしている。その当時の人の背の高さと、マンモスとをわかるように比較していく、工夫をしていると思う。



⑨ 掛軸のスライドケース（遠東博物館）

姦通罪を犯したらしくて、部族の掟で埋めて殺されたのが写真のようにミイラになって残っている。こういう皮まで残っているミイラのようなものは、これからデンマークにかけての泥灰層の中ではいくつか例があり、それが博物館に展示されている。



⑩ ネアンデルタールとマンモス
(ラインラント州立博物館 西独)

これをおみせしたのは、ヨーロッパの場合は壁に平気で描いているということを示した。日本の場合は展示というとパネルに書き、上品にするのが展示だと思われているが、向うは石造りのりっぱなお城の建物をそのまま使っているせいもあるけれど、壁のペンキを塗り直して、その上に平気でこういう絵を描いて、先程説明したように、展示物を棚の上に水平に乗せるのじゃなく、垂直に平気で展示している。その方が非常にわかりやすい、また、手前にのぞきのケースがあり、壁面をフルに使う展示方法をみていただいた。

⑪ 写真は土器を示して、そのかけらがこういうふうにあると、あるいはこの土器のこの壺のかけらはこういうものだと、ドイツ人はこういった展示方法が好きだが、どうもこれじゃあまりパッ

⑫ 同じようなマンモスがいた時代のテントの状況で、上は完全な復元で、石は遺跡で発掘したものを持ってきて、その上に柱などを復元してこういう生活をしていたんですよという展示をしている。

⑬ 写真はデンマークに近い西ドイツの、一番北側のシュレスビッヒホルスタインという所にある。ミイラの展示で、あばら骨は出ているが、頭のところや腕などは、皮がまだ残っていて、金髪も残っている。目隠しされたこの人は若い女性で、この泥灰層の中から

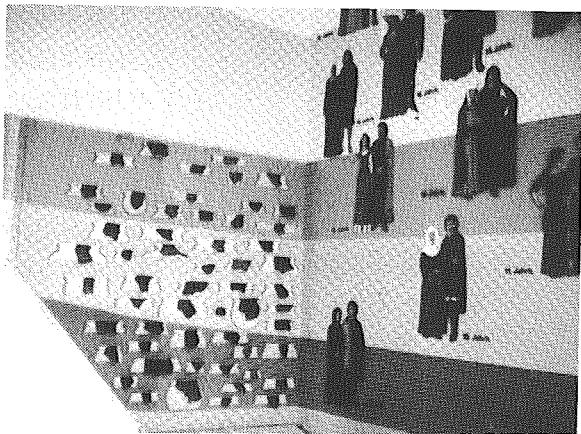
姦通罪を犯したらしくて、部族の掟で埋めて殺されたのが写真のようにミイラになって残っている。こういう皮まで残っているミイラのようなものは、これからデンマークにかけての泥灰層の中ではいくつか例があり、それが博物館に展示されている。

⑭ 写真は同じ博物館ので、こういうのをおみせしたのは何故かというと、この斜面になっているのは、これは元の地山でここに写真のように堀を掘ってみたら、出てくる土器はこういう違いがあるというのを、土器に孔をボルトであけてとりつけている。かけらでは理解できないと考え、形はこういう形ですよと、形を復元してみせている。それだけではなしに、この当時の服装はこういうもの、

あるいはこうだとそれが何年ごろと、これは10世紀、これは9世紀と書いてある。

としない。日本人がこの頃石膏のかたまりの中にちょっとかけらを入れているようなと、どっちがいいのかわからないかもしないが、

それから平気で壁に棚を取り付けて、そこへ物を置いてある。ただし日本の場合は地震国であるから、あんな高い所に乗せておくと、落ちたらどうするかという問題がある。



⑪ 壁にとりつけられた土器と衣装の変遷の展示
(シュレスヴィッヒホルスタイン博物館 西独)

⑫ 写真はフランクフルトの郊外にあって山の上にゲルマンの蛮人からローマの占領地を保護するために、(日本語では長城と訳している)、長城を築いた迷路がある。このローマのリメス(長城)はライン川からドナウ川までの間をつなぎだ防衛線で、その内側(ローマ領側)数百メートルのところに点々とローマ軍が兵舎をつくって防御した。20世紀の初めにその1つの兵舎(前線基地)を復元した。その建物の中の展示の一部にリメスと2キロメートルおきに見張り台があり、その見張り台から数百メートル内側に城壁を築いた兵舎がある状況の絵が壁に描かれている。



⑬ 遺跡の時代別変遷のジオラマ
(ハールブルグ市立博物館 西独)

⑭ 同じジオラマの中で写真は紀元前1000年で、今から3000年前、ここが先程よりは、若干埋ってきた。そしてそこから出土してきたものが並んでいる。その時代は上の左の端にあるのはエジプトの有名な女王の首の像であり、この彫刻を現在東ドイツと西ドイツで取り合いでおり、

⑮ 写真は同じドイツで、ルクセンブルクとの国境に近いトリアーという町の博物館であり、そこはライン川支流のモーゼルというワインで有名な川沿で、町の周辺にローマ時代の遺跡がたくさん残っている。そこで掘った一つの邸宅を館内的一部分に復元している。

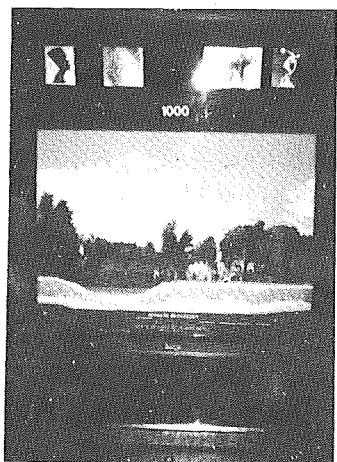
この床にあるモザイクは実物で、この柱もこういう柱頭飾とか、こういう所は実物がところどころにあり、壁面も部分的に実物が入っている。屋敷とそこで使われていた道具も復元してみせている。このように各国いろいろと工夫している。

⑯ 写真はドイツのハンブルクの近くのハールブルグという所に、都市博物館がある。その都市で都市の再開発の時に出た遺跡を、ジオラマ風に20いくつか並べた部屋をこさえているおもしろい。

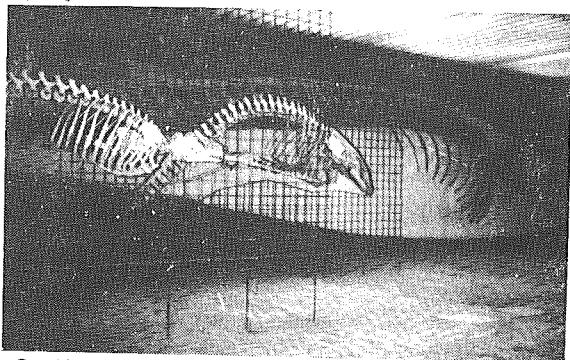
⑰ その中でこういう地形がある。写真は氷山が迫っていて、堆積物がある。それは今から約14万年前だと、左上に説明があって、14万年から12万年半の間のこの辺はこうであったということを記してある。この左のくぼんだ地形をよくみていただきたい。そこから出てきた旧石器を、写真のように並べてある。

エジプトはエジプトでエジプトへ返せという。今、西ベルリンの博物館に並んでいるものである。こちらの右端のミロの円盤投げは今から紀元前1000年前、ギリシャのこういうミロの彫刻を作った時代であるとか、ローマのロームルルスの狼から乳を吸って育ったという伝説の像があり、ここではこうだけれども、諸外国ではこういう時代ですよということを示している。

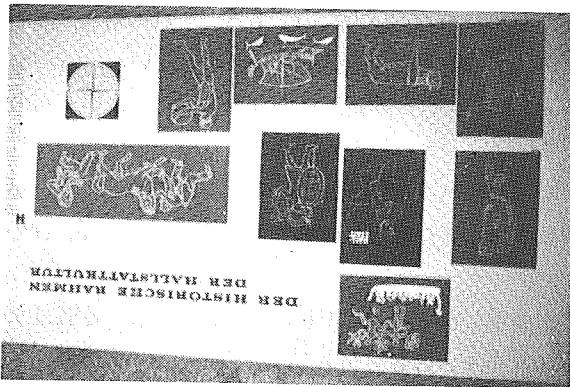
⑬
（紀元前1000年ルブルグ市立博物館）ハールブルグ



して出土したものがこのように14万年の間に変化したということが、市民にわかるように工夫している。



⑭ 鯨を追うイルカ
(フランクフルト大学付属自然史博物館 西独)



⑮ ハルシュタット展示室入口の案内板
(オーストリア国立自然史博物館)

⑰ 写真は紀元後1300年代で、こういう地形で先程より、またこういう風に埋ってきた。この辺には村がこのようにできた。そこで出土したものがこういうもので、というのが並んで、外国の風景、有名な彫刻などが説明されている。

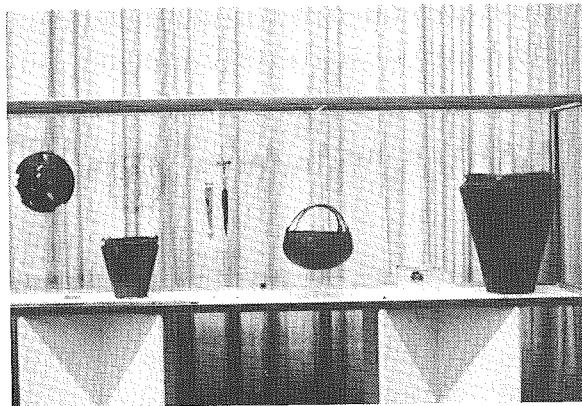
⑱ 写真は1900年で今から80年前、この辺はこうなっていたと今のお年寄がわかるようなもので、1900年頃に使っていた機械の部品みたいなものを下方に並べている。その遺跡は博物館のすぐ側で、都市の再開発を

⑲ 写真はフランクフルトにある自然史博物館で、非常に大きな壁面にクジラの骨が張り付けている。その前を鉄の棒でつくったサッシュがあって、そこへイルカの骨を動きをって展示している。

普通、自然史の博物館というと、どこでもマンモスなどを几帳面な形で展示してあるけれど、これはクジラをイルカが襲っているのが、この展示一つでわかるようにしてある。こういうふうに立体的にするとおもしろい。

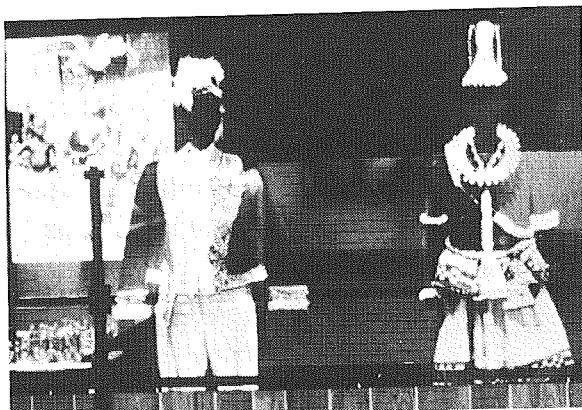
⑳ 写真はオーストリアのウィーンにある青銅器時代ハルシュタット文化の歴史の展示である。これは入口にある。これと同時代の周辺諸国の状況がシンボリックに示されている。例えばローマのロームルルスの狼が描いてあり、ギリシャでは黒絵壺の時代、スキタイではこうだった。北欧の方へ行くとそうだった。それからスペインの方というように、ハルシュタットをとりまく地域的な環境がある程度わかるようにして、それぞれがこうい

う時代ですということを示した。つまりその時代であるかということがよくわかるように示した入口のパネルである。



⑥ ハルシュタット<出土品をつりさげた展示>
(オーストリア国立自然史博物館)

したのでは、その吊り手があるのがわかりにくいというような場合、平気で吊り下げている。スウェーデンでもこういう展示をやっている。



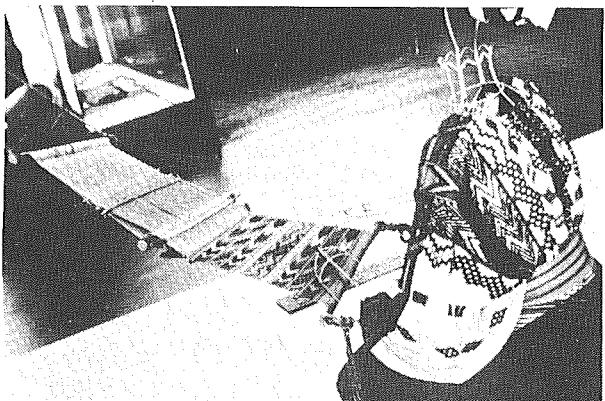
⑦ 礼装の比較（熱帯博物館 オランダ）

ぶらさげている。これはオランダの宮廷で現在でも行なわれているものである。それに対してこれはアフリカなのかインドネシアなのか知らないが、土着の人達の礼装で、頭にはいろいろなものをのっけている。指輪、腕飾り、腰まき風の服装で、これは首長の服装だろうと思う。こういうものをポンと置いたらオランダ人にとっては、こちらはオランダの礼装であり、これは他の国でのこれと同じような時に使う礼装ですよということがピンとわかる。民族展示の一つの例である。それが展覧会の入口に象徴的に置かれていて、この程度のことはこのごろ日本でもいろいろよく行われていると思う。

⑧ これはジャングルの写真が背面にあって、簡単な布でちょっとした服を着ている。これはアラブ系の服装がこちらには永山が写っていて、エスキモーの服装がある。服装はその地域（熱帯、砂漠、北極圏）の服装のちがいがわかるように陳列してある。

⑨ このハルシュタットというのはオーストリアアルプスの山中にある塩の鉱山で、紀元前1000年くらいの時から始まる文化である。この写真には写っていないが、鉱山の中で、鉱山で使っていた木のバケツだとかいろいろなものがそのまま残っていた。鉱山の外側の山腹で数百のお墓が発掘され、そこで出た青銅文化の容器がいろいろ並べてある。この鍋はケースの天井から吊してある。日本の展示では考えられないことである。吊り手があるという鍋は、立ちにくく、パターンと倒

⑩ ここからはちょっと時代が変り、オランダのアムステルダムで見た展示物を若干ご紹介したい。アムステルダムに熱帯博物館、（トローペンミュージアム）があり、この博物館自身はやっぱりオランダの植民地政策を国民に理解させるためにつくったものと思われる。わりに古くさい博物館である。その1階の部分に特別展示をやっていた。その入口に現在のオランダ人の礼装（日本の大礼服）があり、ナポレオンがかぶっていた帽子を持ち、飾りのモールのいっぱいいた服をきて剣を



⑩ 座機（熱帯博物館）

④ 写真は同じ博物館の座機の展示である。これでは実際に機織りはできないだろうが、こういう服装をした人がこういう布をこういう機で織っていたんだという雰囲気はある程度わかると思う。首、手を針金で作ってありこれをマネキンの写実的な人形を置かないでみせているのが、ヨーロッパの一般的なやり方だということを申しあげたかった。なぜかというと、こういう所へ体を具体的に示すようなものを、例えばここに座わっている女人に顔がちゃんと作ってあると、その顔が似ていないということに人間の視線がいってしまう。手なども爪がどうのこうのということになる。

ところがここでみて欲しいのは、こういう機の道具という服装であるということで、人間はその形をある程度想像できるけれども、抽象的に表現している。それが民族資料の展示に関しては大事ではなかろうか。また、こういうふうな服装でこういう姿勢でやるということはやはり示してやらないと困ると思う。

スライドはこれで終ります。とりとめなく外国の私の乏しい経験の中からおもしろそうなものいろいろとみていただいたけれど、また、レジメで書いたように、いかに物に語らせるか、例えば蚊帳ひとつにしても、今や若い人達、子供達は蚊帳で寝た経験もなくなってきたおり、いわゆる民俗資料というのも何に使ったのかということが、全然わからなくなってきた。歴史時代の品物、かつて、これはどう使われたのか全然わからない。それを縄文土器でございます。弥生式土器でございます。沖縄のパナリ焼にしてもそのもの一つをポンと置いたのでは、どんな生活に使われたのかわかりにくい。例えば本部の海洋博記念公園内の郷土村で、復元された家の中で実際に使ってみせたらどうだろうか。

ストックホルムのスカンセン博物館という、スウェーデン各地の民家を集めた博物館ではその家へいくと、その土地の服装をした管理人がその地方的な特色がスウェーデンでも各地で違い、その風俗衣装を着て、ある家では機を織っていたり、ある家ではガラス細工をつくるところをみせている。そこまでいかなくとも、これがどういうふうに使われたかということを、どのようにしてわかるようにみせるかという工夫がいると思う。それから何よりもお願いしたいのは今の日本では博物館というと入れ物を作れば出来あがったみたいに思っておられるが、これは本末転倒もいいところで、どういうコレクションがあって、それを並べるためににはどういう建物が一番良いかというのが本来望ましいことじゃないかと思う。

また学芸員は、私は研究者でございますといい、展示について展示業者にまかせっきりである。今は北海道から沖縄までもそうだろうと思うが、各地でいろいろなものがきていて、私共が行くと、あっこれは○○工芸社の展示だと、これは△△社だというのがわかる、展示業者任せの展示が横行している。展示はやはり手作りいかなきゃいけないと考える。学芸員が自分でトンカチでやる

という意味ではない。つい最近も北海道の手子屈町へ行きまして、教育委員会の人が奇妙奇天烈な建物を建築屋さんのお遊びみたいな建物が出来て、そこでいろいろ近代的な技法を駆使した展示が行なわれていた。ところが評判が悪い。何故かというと教育委員会の担当者は口出しを全然させてもらはず、業者任せであった。

ところが、スウェーデンでもそうであったが、大英博物館でちょうど一部分を展示替をしている担当者と若干時間をもらって話したが、学芸員というのはいろいろな知識を持っていて、ある一つの場所の展示を計画した場合、これとこれをぜひ並べたい。ところがそれは展示を実際に専門としている人達と話してみると、先程から話したように、文字をたくさん書いてもいいし、あるいはあまり一杯あっても自分の部門と他の部門とのつり合いも考えずに、何でも盛りこんだら、結局見た人には、ろくにわからないのではないかというような問題がある。そういうバランス感覚を持っている学芸員もおられると思うのだけれど、なかなか自分の専門で知っていることは全部並べてみたいということがあって、かえって素人にはわかりにくい展示になってしまう。そういうことで大英博物館で話を聞いたら、もめる時は1ヶ月くらいそういうディスプレイの専門家と学芸員とが、展示しようと思うものを前に、ああしたい、こうしようということで、討論し合って決めるのだという。そういう意味ではメキシコ市にある人類学博物館は大学の展示学科と連携して展示をやっているのは大変参考になる。

日本には博物館学講座が、たくさんの大学に設けられているけれど、博物館学というのは何だときいたら、考古学だと、美術史の専門の先生方がろくに展示の問題も知らないままに、かくあるべしというような議論をしておられる。宙に浮いたような話が多い。また、展示のことをいくらかでも知っておられる人達に話をさせれば学問的なことがすっとんてしまうような、中途半端な博物館学が現在の日本で行なわれている。メキシコの場合には学生が一つの展示室を与えられて卒業製作（日本の建築学科などでは卒業製作として設計をするが）、そういうような場所をもらって、いろいろな材料で、こういう風に展示するというのを全部やって卒業していくんだという、非常にうらやましい話を聞いたが、日本もそういう日が来ることを望みたい。

ところが、日本の場合、外国へいろいろなものを展示した時に、外国と条件が違うという問題が一つある。それは湿度で、とくに沖縄の場合は湿度が高い。絵画とかその他の工芸品の場合、にかわをいろいろな形で使う。絵の具を溶いたりするのに使うが、ヨーロッパ系統のにかわは牛の骨から取り、これが湿度40%の時に一番性能が良いものを昔からつくっている。ところが、わが国で使っておる（沖縄県も同じだと思うが）にかわの場合は、湿度が60%でないとうまくいかない。ヨーロッパに持っていき、40%の湿度で展示されると、ひび割れてしまう、というようなことが起ってくる。

奈良の唐招提寺のだいぶ破損した木像で外国のトルソーみたいだと、評判になっている平安時代の初期の仏さんがあり、これを戦後外国へ持って回って、展覧会をやったことがある。持って回っている間にどんどんひび割れてくるので、これは破損したら大変だと、ところが日本へ持ち帰ってみると、今ご覧になっているように、ほとんどひびが元に戻っていて、結局湿度の違いというものがあり、にかわひとつとっても外国と違う工夫が行なわれている。だから博物館の展示は、やはりヨーロッパ、欧米で開発された博物館学というものを鵜呑みにしないで、その土地の状況に合った

ものをそれぞれが工夫なさって、その土地でしかわからないものを、来た人にわかるような展示をしていただく、そういうものを含めて、手作りというふうに考えてみたい。

私も先程からこういう話をしていて心苦しいのは、文化財保護委員会（現在の文化庁）から、ヨーロッパの歴史博物館がどうなっているのか見てこいと言われて、ホイホイと行った。イタリアまで行き、イタリアでおまえ何をしに来たのだと言われて、実はこうこうですと言ったら、イタリア人のある学者に笑われた。そんなものはその土地で自分で考えるもので、何故よそを見に行って何が参考になるかと言われた。イタリア人はとくに文化的なことに独立心が旺盛であり、中国の中華思想と似たような、自分のところが一番良いのだという気持を持っている。日本人は今、何でも盗んで行くと、ヨーロッパ人は考えておる。そういう意味合いを含めて、私等も盗みに行った方に違いないけど、他国を見聞していかに自国の文化財のことについて自分で考えるか、自国の、自県の、つまりその土地でなければ見られない特色あるものを、県民、国民、外国人にどうみせるか、いかに人々に印象を強く与えるか、ということを自分でそれぞれ考えなければならないとしみじみと感じた。

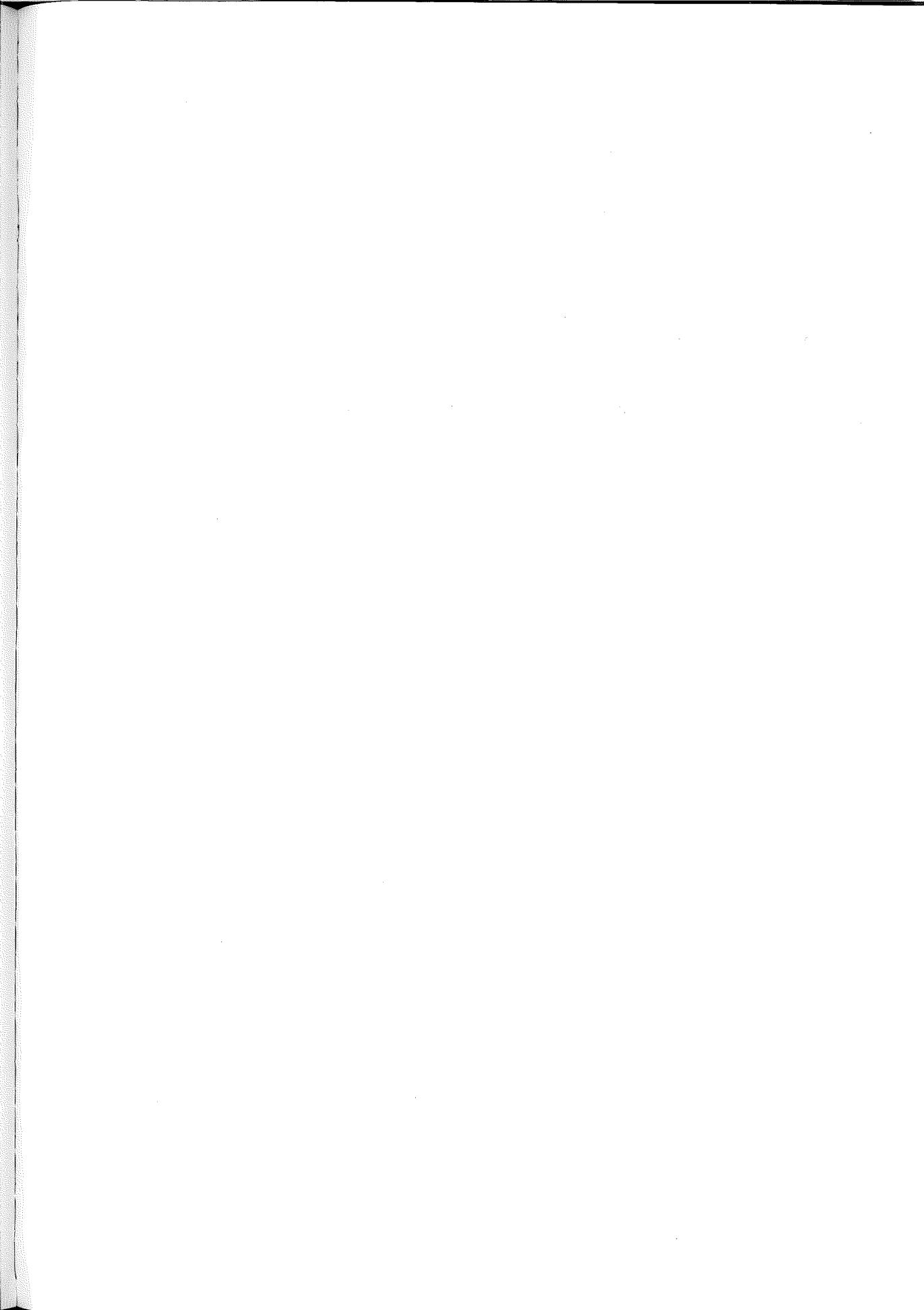
沖縄の場合、沖縄の特色のある文化を、物で、県民はじめ他県民、外国人にいかに見せるかということであろう。しかも一方には、先程ご覧になっていたいものの中でおわかりのように、アメリカのシカゴの、世界でも有名な自然史の博物館で、先住民であるインディアンの文化を展示するパネルに書いてある絵は、下手な漫画家が描いたようなちやちな絵である。ああいうものじゃあ、ある程度の鑑賞力を持った人には少し安っぽく見えるかと思う。だからそういうものも本当に一流（何を一流と考えるのか問題があるが）の、しっかりとした人に協力していただいて、その土地でなければできないものを作るという方が一番大事なことだと常日頃から思っている。

沖縄は美術作品でも非常に勝れたものがたくさんあるということを存じておりますけど、やはりそういうものがどういう環境で作られたのか、かつてそういうものがどういうふうに作られて進歩してきたか、進歩というか今日あるというようなことを、どうやって理解してもらえるか皆さんでこれからその土地その土地でご工夫願いたいものです。くれぐれも歴史博物館で難しい学術用語を一番先頭に立てないで、これは何年位前のだということを、これについてはここにおられる知念君だったら何年とするか、また学者の間でいろいろ批判があるから、あるものについて年代を決めるのに、若干問題があろうかと思いますが、これもしかし大きく間違っていれば、どんどん訂正していくべきいいのでありますし、学問の現在の時点で一番こうだと考えられている公平な先端的なものを並べたても一向にさしつかえないと思います。あまり学芸員の一人よがりの展示をせひやめていただきたいという気がするのです。

歴史展示についてという大きなテーマをいただきながら、どうもざっぱくな話で申し訳ないのですが、まず入れ物をつくったら博物館は終りだ、というのではなくて、計画的にやっていただきたい。例えばヨーロッパでは、あるコレクションがあって、この建物を博物館に使うんだ、と私が行きました時にすでに準備をやり始めていた博物館が、15年を経てやっとオープンしました。それ程慎重にいろいろやったということですが、そういう例もありますが、日本と予算のしくみが違うわけでありますけれども、そういうことよりも、常に改良していっぺんで良いものができなくても、だんだんと改善していける工夫を常にしなければならない。一ぺん展示が終ったらもうこれ

で何年経っても、ほこりをかぶっても放ったらかしてあるというような展示が多いこの世の中で、そういうことに注意をしてやっていただきたい。それから先程から申し上げましたように、物にできるだけ語らせて、そこに来た人に肌で感じさせるような展示をご工夫していただきたいという事をお願いしたいと思います。どうもざっばくな話で失礼致しました。

註　講演をテープに納め、それを起したのであるが、紙幅の都合で文章を縮めたため、中間の写真説明ならびにその後半の一部を、「です」、「ます」調を、「である」、「であった」調に、編集者の要望で直した。なおスライド説明のうち、アメリカの博物館を割愛した。



〈資料紹介〉

辞令書等古文書調査報告補遺

(一)

上江洲 敏夫

(うえす としお 県立博物館学芸員)

沖縄県教育委員会（事業主管課は教育庁文化課）では、昭和五十三年度国庫補助事業の一環として、首里王府発給の辞令書及び関連家譜を中心とした古文書調査を実施している。この調査は筆者が文化課在勤中に、島尻勝太郎・安良城盛昭・波名城泰雄の三氏とともに実施したものである。沖縄県全域と慶長十四年（一六〇九）以前まで首里王府の管轄下にあった奄美諸島を調査範囲に実施されたもので、調査の結果、沖縄諸島に七十三点、奄美諸島に十一点の辞令書が確認され、家譜・古記録に掲載されたものや先学が利用したもので現存しない辞令書が、沖縄諸島に十七点、奄美諸島に十五点確認された。その成果は『辞令書等古文書調査報告書』（一九七八年）として刊行されている。

辞令書は「御印判」と称され、役職を補任したり、ある特定の土地や石高を給賜した際に、首里王府が発給した公文書である。この辞令書がいつから登場したかは判明しないが、確認される最古のものは、「田名家文書」（三十二通の辞令書。重要文化財。田名弘氏蔵）の第一号辞令書である。これは尚真王時代の嘉靖二年（一五二三）に発給されたもので、おそらく国家的支配体制が整備・確立された尚真王時代とみて大過ないであろう。

また、確認されるもつとも新しい辞令書は、尚泰王時代の同治十三年（一八七四）である。この尚真期から尚泰期までの三五〇年余にわたりて発給された辞令書の様式も、仮名から仮名交り、康熙年間以後は漢文表記へと変化し、康熙六年（一六六七）には、それまで貴賤重軽を問わず官職を受賜したものに発給していたものを、高官・重職にのみ限定するという、辞令書発給の改定が打ち出されている。様式・内容の変化や発給制限という変遷をたどりつつも、三五〇年余にわたって発給された辞令書には、それぞれの時代相が反映され、相対的に古文書の少ない本県では、首里王府時代の官職制や神職制、経済的側面の一端を知る貴重な傍証史料としての価値を有する。

今回、ここに紹介した十一通の辞令書は、安良城家（当主は安良城政効氏）に伝存されてきた世襲文書である。辞令書のほかに七世を系祖とする「蔡氏世系図家譜」及びその分家の家譜二冊、草稿と目される仕次と系図座に提出し、添削されて返された仕次（前表紙には、十八番、蔡姓家譜仕次、泉崎村、屋嘉部里之子親雲上、添削を受けたことを示す糾合・調部の朱書あり）、同じ添削済みの仕次（安良城親雲上、糾合済と調べの墨書あり）、乾隆五十年の「墓敷讓渡証文」一通、十一世屋嘉部

里之子親雲上政綱が、嘉慶十二～十五年にかけて勤務していたときの「御仮屋守日記」（表欠にて仮題）一冊が関連文書である。安良城家は、久米村系の本部親雲上政恒を元租とし、その六世の渡久地親雲上政包の次男筋で、七世阿波連親雲上政房を系租としている。

辞令書は、系租の七世政房から十二世政宜までの、雍正二年（一七二四）から同治六年（一八六七）に至る一四三年間に発給されたものである。①～③までは系祖政房の辞令書である。①の辞令書は、一七二四年に渡嘉敷間切の阿波連地頭職に任じられたもの、②の辞令書は、一七三二年に御物城職に任じられたもの、③の辞令書は、翌一七三三年に具志頭間切の喜納地頭職に任じられたときのものである。三年後申口座、さらに三年後には砂糖奉行職に叙任され、一七五二年八十歳で死去している。④の辞令書は、八世政盛が一七五〇年に恩納間切の名嘉真地頭職に任じられたときのものである。彼はその二年後に父政房の家督を継いで具志頭間切の喜納地頭に任じられている。⑤～⑦までは九世政知の辞令書である。⑤の辞令書は、一七七一年に父の家督を継いで読谷山間切の古堅地頭職に任じられたときのもので、⑥の辞令書は御物城職に任じられたときのもの、⑦の辞令書は、玉城間切の屋嘉部地頭職に任じられたときのものである。⑧の辞令書は、十世政賀が一七八五年に、父の家督を継いで玉城間切の屋嘉部地頭職に任じられたときのものである。⑨～⑪までは十世政宜の辞令書である。ところが、家譜には政宜に関する記事は出てこない。政宜は前掲の「御仮屋守日記」を最初に書き記すという功績を残した十一世政綱の次男として生まれているが、十一世の長男政親に嗣子がなかつたために、本家の養子となつて家督を継いでいる。「祭姓家譜仕次」（十八番、安良城親雲上）に、政宜に関する記事がある。ところが、⑨～⑪の辞令書にあるような、一八六六年に御物城職に

任じられたことや、同年南風原間切の仲本地頭職に任じられたこと、さらには翌年宜野湾間切の新城地頭職に任じられたことなどの辞令書との関連記事は記されておらず、この頃の記録としては、同治八年（一八六九）に申口座に叙任されたことが記されるのみである。

ここに紹介した十一通の辞令書は、時代的にはさほど古い時代のものではないが、これだけの量がまとめて保存されているという事例は、重要文化財「田名家文書」以外には見当らない。それだけに世襲文書として貴重な価値を有する。

首里之御詔

渡嘉敷間切

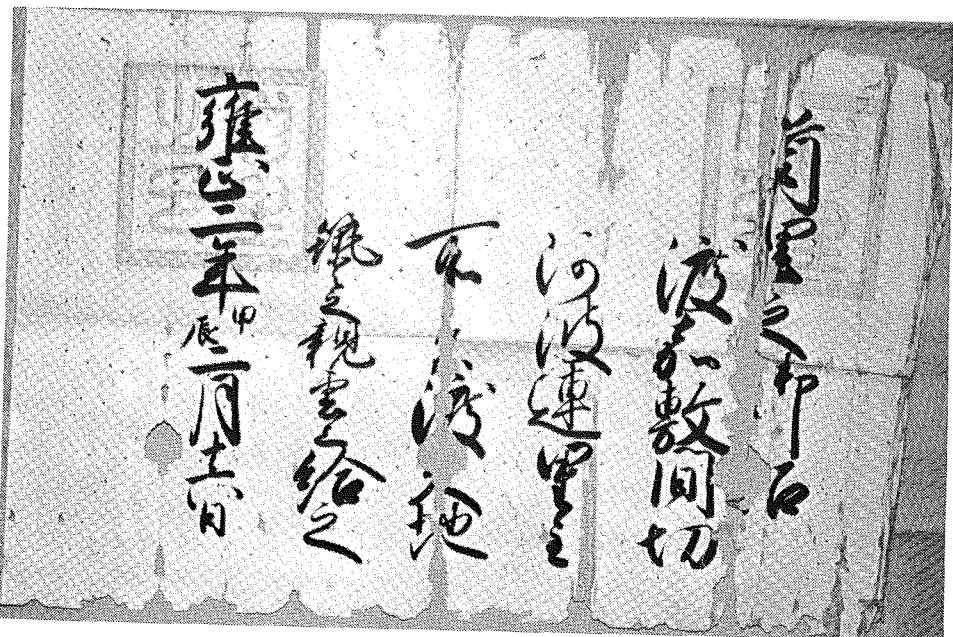
波敷間切

阿波連里子

所者渡久地

筑登之親雲上給之

雍正二年甲辰二月十六日



① 渡嘉敷間切の阿波連里主所安堵辞令書

法量 縱一八一cm
横四三一cm
料紙 唐紙

雍正二年中辰二月十六日任渡嘉敷間切阿波連地頭職

〔備考〕「蔡氏世系図家譜」七世 政房

(首里之御詔)

御物城者蔡氏

安波連親雲上政房

給之

雍正十年壬子二月六日



法量 縱一六·六 cm
料紙 橫三八·六 cm

唐紙

[備考] 「蔡氏世系圖家譜」七世 政房
同(雍正)十年壬子二月初五日任御物城職
三年職共

首里之御詔

具志頭間切喜納

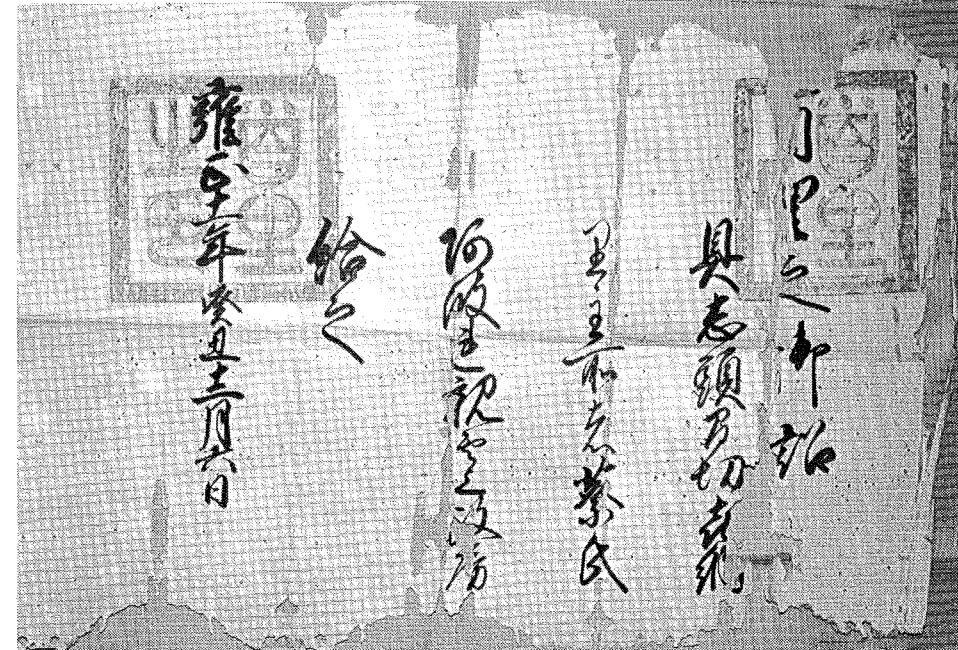
具志頭間切

里主所者蔡氏

阿波連親雲上政房

給之

雍正十一年癸丑十二月六日



法量 縱二七·一 cm
綱一 cm
横四〇·六 cm
料紙 唐紙

③ 具志頭間切の喜納里主所安堵辭令書

〔備考〕「蔡氏世系図家譜」七世 政房
同（雍正）十一年癸丑十二月六日転任
具志頭間切喜納地頭職

首里之御詔

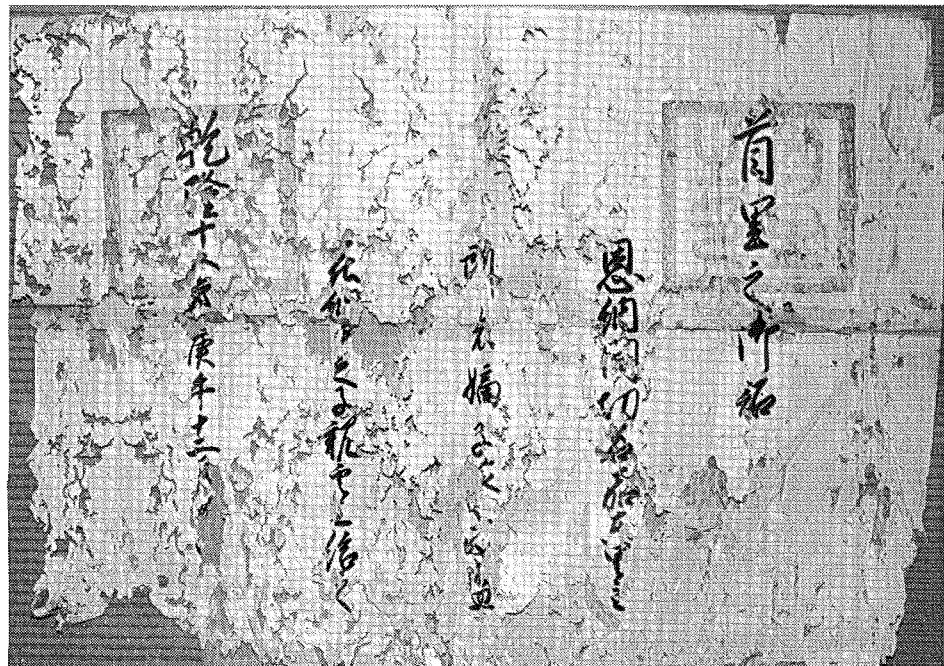
首里之御詔

恩納間切名嘉真里主

所者嫡子 政盛

喜納里之子親雲上給之

乾隆十五年庚午十二月廿日



④ 恩納間切の名嘉真里主所安堵辞令書

法量 縱三一・七 cm
料紙 唐紙 橫四五・六 cm

〔備考〕 「蔡氏世系図家譜」八世 政盛
同年（乾隆十五）十二月二十日蒙賜恩納間切
名嘉真地頭職

首里之御詔

讀谷山間切古堅

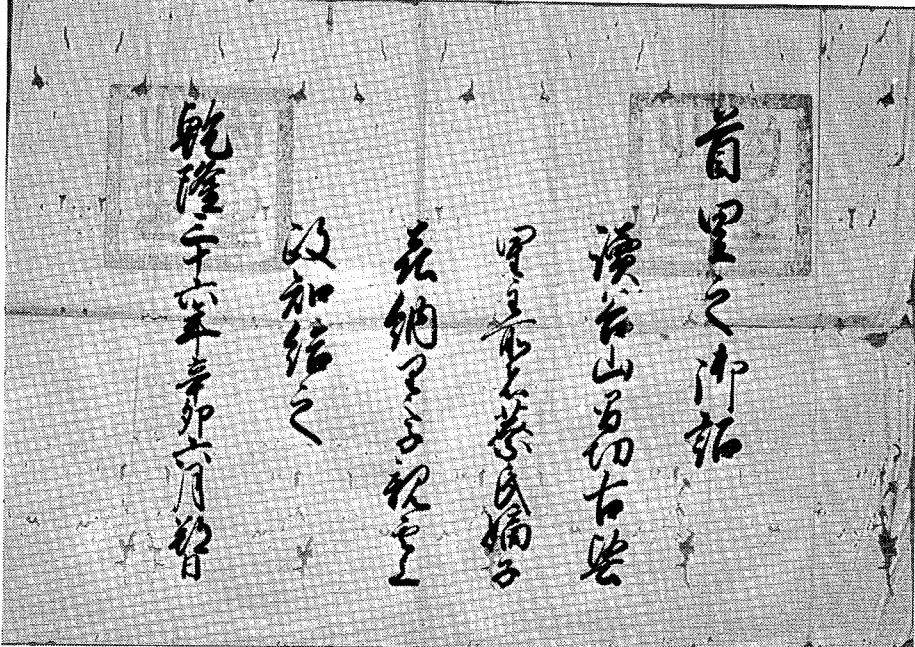
里子所者蔡氏嫡子

喜納里之子親雲上

政知給之

乾隆三十六年辛卯六月朔日

法量 縱三三・二
cm 橫四七・二
cm
料紙 唐紙



⑤ 読谷山間切の古堅里主所安堵辞令書

〔備考〕 「蔡氏世系図家譜」九世 政知
同(乾隆)三十六年辛卯六月初一日繼父家督
転授読谷山間切古堅地頭職

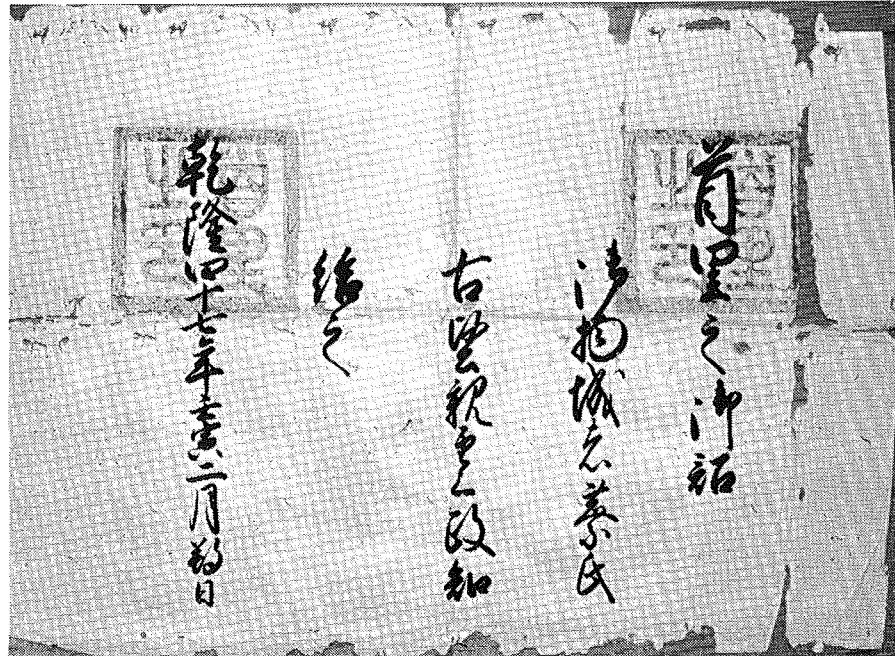
首里之御詔

御物城者蔡氏

古堅親雲上政知

給之

乾隆四十七年壬寅二月朔日



法量 縱三三·五
cm 橫四六·三
cm
料紙 唐紙

⑥ 御物城職補任辭令書

〔備考〕 「蔡氏世系圖家譜」九世 政知
同(乾隆)四十七年壬寅二月朔日任御物城職

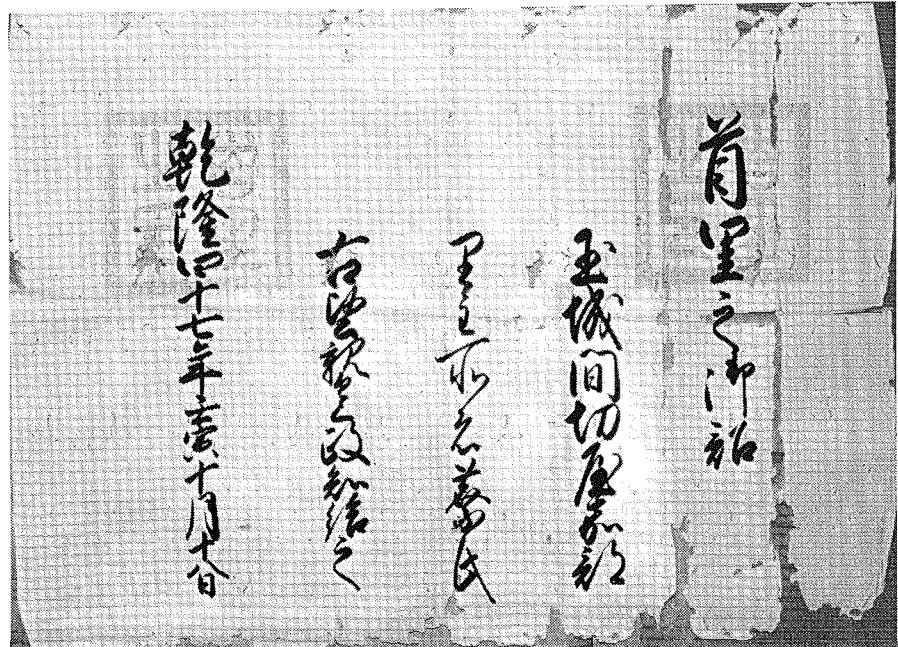
首里之御詔

玉城間切屋嘉部

里主所者蔡氏

古堅親雲上政知給之

乾隆四十七年壬寅十月十八日



⑦ 玉城間切の屋嘉部里主所安堵辞令書

法量 縱三三・五 cm
横四六・三 cm
料紙 唐紙

首里之御詔

首里之御詔

玉城間切屋嘉部

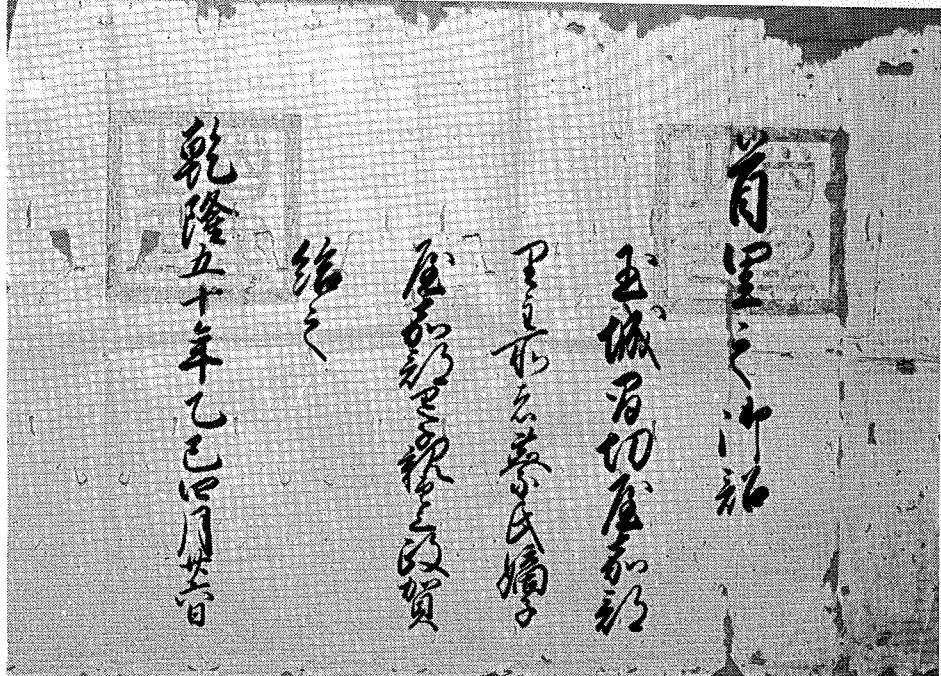
里主所者蔡氏嫡子

屋嘉部里之子親雲上政賀

給之

乾隆五十年乙巳四月廿六日

法量 縱三三・七 cm
料紙 唐紙 橫四六・四 cm



(8) 玉城間切の屋嘉部里主所安堵辞令書

〔備考〕「蔡氏世系図家譜」十世 政賀

同(乾隆)五十年乙巳四月二十六日繼父家督任玉城

間切屋嘉部地頭職

首里之御詔

御物城者蔡氏嫡子

屋嘉部里之子親雲上政宜

給之

同治五年丙寅二月朔日

-11-



法量 縱三一·八cm 橫四五·一cm
料紙 唐紙

首里之御詔

南風原間切仲本者

蔡氏嫡子屋嘉部

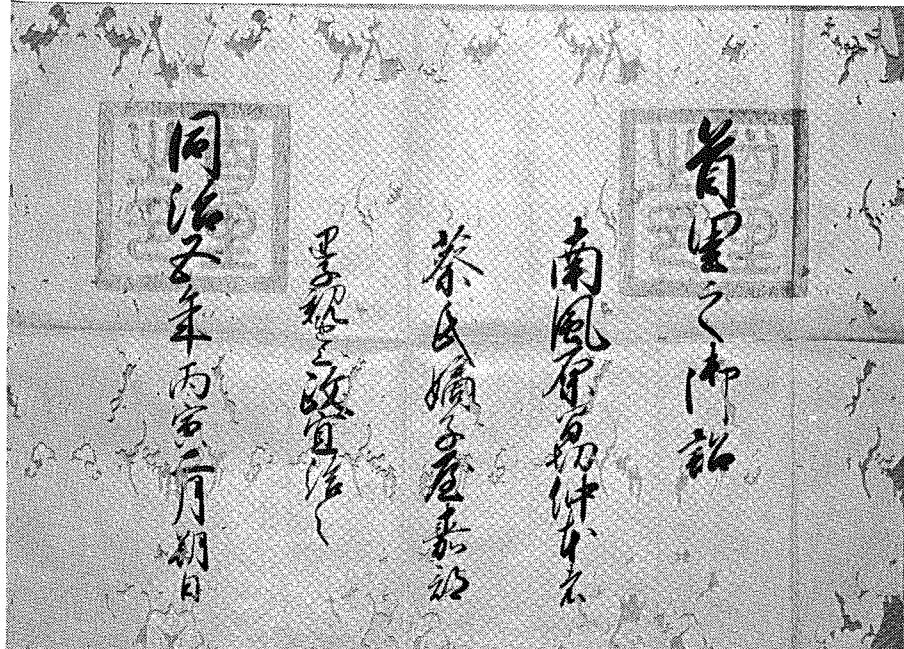
里之子親雲上政宜給之

同治五年丙寅二月朔日

蔡氏嫡子屋嘉部

同治五年丙寅二月朔日

法量 縦三三・八cm
唐紙 橫四五・四cm
料紙



⑩ 南風原間切の仲本安堵辞令書

首里之御詔

宜野湾間切新城

里主所者蔡氏

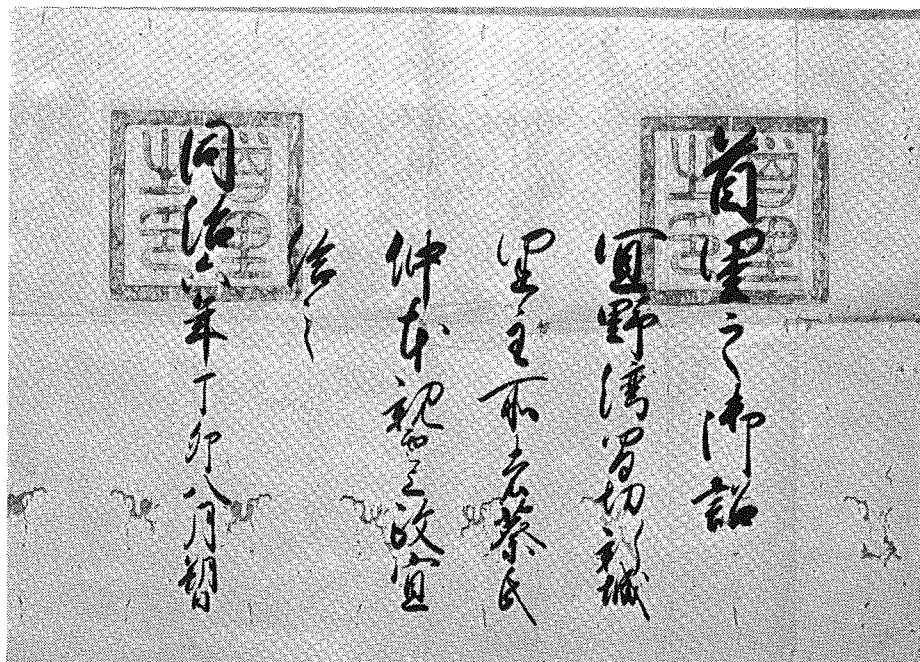
仲本親雲上政宜

給之

同治六年丁卯八月朔日

同治六年丁卯八月朔日

法量 縱三二·七cm
料紙 橫四五·八cm
唐紙



⑪ 宜野湾間切の新城里主所安堵辞令書

沖繩県立博物館

沖繩県立博物館紀要

第 9 号

1983年3月20日 印刷

1983年3月31日 発行

編集・発行 沖 繩 県 立 博 物 館

〒903 那覇市首里大中町1の1

TEL (0988) 84-2243

86-4353

印 刷 株 光 文 堂 印 刷 株

〒901-11 南風原町字兼城557

TEL (0988) 89-1121